

鳥と少年

アーリン・ペダーセン 作
山内清子 訳
中村悦子 絵

仕事熱心で、きびしいパパ。やさしいけれど、ぼくのことわかってないママ。学校には、友だちなんかいない。そんな少年グンナルは、鳥が大好き。ひっこしたばかりで、都会の生活になじめずにいたある日、伝書バトを飼っている、ひとりぼっちの老人マーチンと出会う。やがて、ふたりはハトをつれて、グンナルがもといた町ブローテンへ……。
北欧のいなか町の静かな自然を背景に、少年と老人の友情を通して、家族のすがたや、生命の誕生と死を見つめた物語。ノルウェーでは、テレビドラマ化された話題作。

鳥と少年

アーリン・ペダーセン作
山内清子 訳、中村悦子 絵



佑学社

FUGLEKONGEN

Erling Pedersen

Published in Japan by Yugaku-sha, Ltd., Tokyo
Japanese translation rights arranged with
H. Aschehoug & Co.(W.Nygaard), Oslo

1

九月のある朝早く、小さなブローテン農場の空はすみわたっていた。太陽は東の山の峰にすがたをあらわし、やわらかくあたたかい光を、かたむいた納屋とペンキのはげた母屋にそそいでいた。トーレ・オルセンは、台所道具のいっぱいつまったダンボール箱を、重そうにかかえて庭を横ぎり、ワゴン車にどしんとのせた。それから、背中をのばして遠くをながめた。トーレは大工職人だ。だから、本当なら、自分の家があれるのをそのままにしておくはずはないのだが、近ごろは、遠くはなれたオスロ市の会社で働いているため、家の手いれをするひまも気力もなくなっていた。長い道のりを毎日往復していたのでは、時間もなくなるし、からだはつかれるばかりだ。そこでトーレは、家族みんなでオスロへうつり住むことに決めた。今日がそのひっこしの日だ。

妻のリーナ・オルセンが、寝具をかかえて家から出てきた。さっきまでリーナは、部屋から部屋をいそがしくまわって、かたづけをしたり、荷づくりをしたり、そうじをしたりしていたのだ。

「グンナルはどうした？」トーレがきいた。

「今、来るわ。ちょっと待ってやってね」
ほっそりしたからだつきの十歳の男の子、グンナルは、自分の部屋の窓辺に立って森を見ていた。使い古した望遠鏡をつかんでいる。いつものように望遠鏡でうす暗い静かな森のなかを見ようかと思った。だが、あきらめた。

どっちみち、あしたからは、モミの木のてっぺんで鳴くツグミの声を聞くことも、山のはしをゆうゆうと飛びながらえものをねらうハイタカを見ることもできなくなるんだ。今は、ここにあるあらゆるものに、わかれをつげなければならない。巣づくりにいそがしい鳥の行き来を、さらさらと鳴る木の下で、息をころして見ていた日々ともおわかれだ。モミの木にのぼって、ゆらゆらゆれながら、ひとりで幸せな気分にひたった夕方ともおわかれだし、小鳥のさえずりにみちあふれ、しっとりと露にぬれた朝ともおわかれだ。

グンナルはゆっくりとため息をついて、望遠鏡をゆかのダンボール箱にしまった。そこには、グンナルのノートが何冊もはいっている。ノートにはスケッチがあったり、絵の切りぬきや鳥の羽がはってあったり、マヒワやカケスについての秘密の話が書いてある。ダンボール箱にはそのほか、グンナルの参考書、つまり、『原色鳥類図鑑』『ノルウェーの鳥』『鳥の観察』などがはいっている。

ママは、全部町へもって行ったらいい、といっていた。

いつのまにか、ママが、グンナルの部屋の入り口に立っていた。グンナルがふりむいた。ママはグンナルの顔を見ないようにして、部屋のなかをぐるりと見まわした。
「したくはできたの？　パパがお待ちかねよ」
グンナルは返事をしなかった。
しばらくして、ママがいった。
「グンナル、あなたの気持ちはよくわかるわ。本当よ。こんなふうにひっこすなんて……」
「ねえ、ぼくたちどうしてひっこさなきゃならないのさ」
「しかたがないのよ」
ママは、ゆっくりこういって、来たときとおなじように、音をたてずに立ち去った。
グンナルはしばらく窓辺に立っていたが、やがてダンボール箱をベッドの下におしこみ、大きな足音をたてて部屋を出た。

ブローテン農場で、いちばん大きくてたいせつにされている木はカシの木だ。
グンナルは庭に出て、カシの木の幹によりそい、ごわごわした木肌に手をあてた。グンナルは、この木の根方に立つのが好きだ。この木のつんと鼻をつく、すっぱいにおいが好きだ。この木にの

ぼるのも好きだった。のぼるたびに枝の一本一本が、しっかりとグンナルの手足をささえてくれたものだった。この木の枝に、何時間もだまってすわっていたこともあった。こずえといっしょに風にふかれてゆらゆらゆれながら、目の前にひょっこりあらわれた鳥を観察することもできたし、とりとめのない夢を追うこともできた。

　でも、これからはもうできない。

　とつぜん、鳥の群れが山をこえてやって来た。舞いあがったかと思うとふたたび舞いおりて、そのたびに新しい形をととのえた。びっしりとかたまった鳥の群れが通ると、空が暗くなった。群れに追いつこうとして、けんめいにあとを追ってくるのもいる。

　鳥の群れは納屋の上を飛び、畑をこえたかと思うと、さっと左に旋回してもどってきた。ザーッという羽音をたて、ピッピッと鳴きながら、舞いおりて、しげったカシの木のなかにはいった。

　グンナルの胸はおどった。

　鳥のあいさつだ。鳥たちがぼくのところへ来てくれたんだ。ぼくがひっこすのを知っていて、いま、こうして、さよならをいいに来てくれたんだ。

　パパが戸口にすがたをあらわした。グンナルをさがしに家へはいって、また出てきたのだろう。

「グンナル、もう用はすんだんだろう。おいで。さあ行くよ」

そのとき、さっきの鳥の群れがカシの木からいっせいに舞いあがって、来たときとおなじように、すばやく飛び去っていった。

「パパがおどろかすからだよ。何にもわかってないんだから！」

トーレはちょっとグンナルを見たが、すぐに自動車のほうへ歩いていった。

そのとき、木の上のほうで、何かのすべり落ちる気配がした。ほとんど聞こえないくらいの、かすかな音を立てて、小鳥が一羽、枝づたいに落ちてきて、草の上で動かなくなった。

グンナルはかけよって、ひざをついて身をかがめた。

小鳥のからだを、最後のけいれんが走った。羽がピクッと動き、それきり息がたえた。

グンナルが、その小鳥を手にのせた。羽毛につつまれた小さなからだは、もえるように熱かった。小鳥の心臓は、たったいままで早鐘のように打っていたにちがいない。だが、いま打っているのは、グンナルの指先の脈だ。

頭は金色、からだはオリーブ色の鳥だ。とても軽い。ほとんど重さを感じないくらいだ。それなのに、地面へ落ちてきたのだ。

これも何かの知らせにちがいない。何か悪いことの前ぶれかもしれない。

グンナルは、この小鳥をママに見せたかった。そして、この小鳥の埋葬をパパにてつだってもら

いたかった。

でも、今はパパもママも耳をかしてくれないだろう。ふたりとも、ひっこしで気が立っているから。

パパは最後の荷物のスーツケースをとりに、家にはいっていった。

グンナルは、すばやく庭を横ぎってかけだした。からっぽでぶきみなほど静かなニワトリ小屋の前をいそいでかけぬけ、小屋のわきに置きっぱなしになっていたスコップをつかむと、畑のあいだのあき地におりていった。

草はかれていて土はかたかったが、グンナルはようやく、根のはった草を一かたまりほりおこして、墓あなをあけた。その暗いあなに、小鳥のからだを、ていねいにほうむるのだ。

ノルウェーでいちばん小さな鳥、キクイタダキだ。

それなのに、今、手にのせてみると、重い。死が小鳥のからだを下へ下へとひっぱっているのだ。

そのとき、「死ぬっていうのは、落ちることなんだ」という思いが、閃光のようにグンナルのからだを走った。グンナルはこわくなった。小鳥のむくろにすばやく土をかけると、一目散にかけだした。

パパはグンナルを待っていた。

「また鳥が死んだのか」
「ただの鳥じゃないよ。キクイタダキだよ。『鳥の王』ともいうんだから」
トーレは、肩をすくめた。
「おまえこそ鳥の王様だろうよ。だがね、グンナル、今はほかにもっと考えることがあるはずだろう」
ようやく、リーナが家から出てきた。玄関のとびらをしめて、さびた鍵をさしこんで、まわすと、リーナはしばらく、そのまま動かなかった。泣いているのをふたりに見られたくなかったのだろう。
数キロメートル車を走らせると、景色がひらけて、村の中心へ出た。商店のならぶ道を通るとき、女主人が、ショーウインドーをふいているのが見えた。リーナが手をふったが、こたえてもらえなかった。駅をすぎ、役場をすぎ、学校の前を通った。
学校はいま授業中だ。校庭はガランとしている。一年生がふたり、倉庫のむこうで、ゴムとびをしていた。
ふと、グンナルは、クラスのことを考えた。グンナルには仲のいい友だちはいなかった。同級生の顔も、もう、はっきり思いだせない。
グンナルは、ママのあたたかい肩に頭をもたせかけた。何もかもわすれるために、早くねむりた

かった。
やがて、車はハイウェイに出た。たえまなく聞こえる風の音が、ここちよい子守歌となり、グンナルの頭は、だんだん重くなった。そしてかあさんに手をにぎってもらうと、まもなくうとうとしはじめた。

その晩、グンナルは、新しい部屋でねることになった。かべには黄色いかべ紙がはってあり、コンクリートの天井には、白いペンキがぬってある。窓には、まだカーテンがない。グンナルのベッドから見えるのは、四角く切りとられた空だ。

ママが来た。

「グンナル、あなたもねむれないの？」

グンナルはしばらくしてから、いった。

「うん。くたびれてないもの」

ママはベッドのはしにすわって、グンナルのほおに手をあてた。

「あたしたち、町でもちゃんとやっていかれるわよね。だいじょうぶよね」

そこへ、パパが顔を出した。

「リーナ、まだねないのかい」

ママは、パパから目をそらしていった。

「あたし、車のなかで、よくねむっちゃったから……」

「もうねなさい。あしたから、ふたりともいそがしくなるんだよ」

「でも、あたしとグンナルは、あした一日ゆっくり休まなきゃ」

「じゃ、学校はどうするんだ」

「ちゃんと、行きますよ」ママはまじめな顔をパパにむけた。

「グンナルは、勇気（ゆうき）を出してここの学校にはいらなきゃいけないんだよ。いいかい。人間ぎらいは、町じゃ通用しないんだからね。男の子は人なかへ出て、自分をきたえるんだ。いつまでもママにあまったれてちゃ、だめだぞ」

「グンナルは、人間ぎらいなんかじゃないわよ」

「ぼく、うちへ帰りたい」グンナルはぽつんとつぶやいた。「ぼく、ブローテンへもどりたい。どうしてひっこさなきゃならなかったのか、ぼくには、わからないんだ」

パパはママを見たが、ママはパパを見ようとしなかった。

トーレは部屋を出て、そっと戸をしめた。

グンナルはしばらくベッドにはいっていたが、やはり、この部屋(へや)ではとてもねむる気になれなかった。

ペンキのにおいがする。いや、かべ紙のにおいかもしれない。かべにしみこんだ、だれかほかの人のにおいかもしれない。

リーナはベッドにこしかけてグンナルをやさしくなでつづけていた。

まもなく、グンナルは自分のからだが落ちていくような気がしてきた。しだいしだいに深い暗がりへころがり落ちていく。グンナルは、夢中(むちゅう)でさからおうともがいたが、つかまりどころがないまま、まっすぐ下へと落ちていった。

グンナルが目をさましたとき、太陽は高くのぼっていた。はじめ、自分がどこにいるのかわからなかった。

やがて、階段(かいだん)をのぼるくつ音がひびき、エレベーターの動く音がした。だれかがにぎやかな音楽を演奏(えんそう)している。あいている窓(まど)から、自動車の音や人の声や、工場の音が低(ひく)く聞こえてきた。

聞きなれない音ばかりだ。

グンナルは思わず耳をおさえ、まくらをかぶって、ふとんにもぐりこんだ。

まもなく、グンナルは気をとりなおして立ちあがり、窓辺に近づいた。

見えるのは、屋根ばかりだ。茶色の屋根あり、黒い屋根あり、赤い屋根あり、黄色い屋根もある。いろいろな形の煙突や排気筒がある。よごれた天窓もある。

見ているうちに、屋根と屋根のあいだに、ぽっかりあいたあなのような空間があるのに気がついた。そこは、アパートの中庭になっているらしい。木は一本も見えない。

グンナルは窓をいっぱいにあけ、身をのりだして、下をのぞいた。グンナルのいる八階から見ると、ずっとずっと下のほうに道が走っている。舗装した道を、赤いバスが通った。老婦人がふたり、かどの店からゆっくり出てきた。一かたまりの男たちが、階段にすわって、びんをまわし飲みしている。

こんなに高いところへのぼったのははじめてだ。町の騒音のなかに、すいこまれていきそうだ。

いっしゅん目がまわった。

やがてめまいがやみ、遠くへ目をうつすと、東の方に、かすかに森が見える。

鳥を見るにはあそこまで行かなきゃならないのだろうか。

グンナルは、がっかりして、部屋のおくへもどった。

居間では、リーナがかべに絵をかけようとしていた。湖のほとりのオオジカの絵を、今までとおなじように、ソファーの後ろにかけるつもりだった。ブローテンの家のかべは、松材でできていたから、湖や森の絵をかけるとうまく合っていたが、花もようのビニールのかべ紙では湖もオオジカもだいなしだった。

リーナはかけてははずし、またかけてみて、グンナルにどうかときいたが、けっきょく、かけるのをやめた。

それから、朝食に、台所からミルクとクネッケ*をもってきて、あき箱の上にならべた。

「丸パンがあったらいいのにね。まだオーブンを置いてないから、がまんしましょ。オーブンが置けたら、おいしいパンをやいてあげるわ」

「通りのむこうにお店があるよ。パン、買ってこようか？」

「いいえ、いいのよ。オーブンが置けるまで待ちましょう。あわてることないわ」そして、少しまをおいてから、ことばをつづけた。「買いものはパパにつれていっていただきましょう。町のことなら、パパがくわしいから」

それでも、お昼近くになると、ふたりで外へ出てみることにした。

ママは鏡の前で、何度も上着のえりをなおしたり、スカートを軽くひっぱったりしている。

*クラッカーのようなお菓子。朝食によく出される。

グンナルは戸口で待っていた。
「何を緊張してるのさ？」と、グンナルはいった。
「緊張なんかしてないわよ」とママが答えた。「そうね、あなたはいつも、とても勇気があるのよね。ひとりで行きたいんでしょ？」
「ああ、ひとりで行ってもいいよ」グンナルは強がってみたけれど、ひとりで町を歩く気なんか、さらさらなかった。
ふたりは通りへ出た。自動車の騒音。トラックが、猛スピードで目の前を走り去った。
リーナはグンナルの手をしっかりつかみ、けっしてはなそうとしなかった。
ふたりは、右も左も見ないで歩道をいそいだ。とつぜん、ママがグンナルの手をぎゅっとにぎりしめたので、グンナルはびっくりして立ちどまった。
目の前に、男の人が横たわっている。ぴくりとも動かない。腕をからだの下におりまげて、だらしのない顔をアスファルトにおしつけている。
「病人だよ。お医者さんをよぼうよ」
「ちがう！」とママがいった。「ちがうわよ。この人、病人じゃないわよ、きっと。さあ、行きましょ」
リーナは、グンナルの手をにぎったまま、また足早に歩きはじめた。

小さな店のなかは、はじめてかぐ、ふしぎなにおいがした。せまくてごちゃごちゃしている。たなや戸だながそこらじゅうにあって、しおれた野菜と新鮮な野菜がごちゃまぜにならべてある。ゆかにはごみがちらかっているし、入り口のマットは、すり切れていた。
店の主人が、ふたりの前にあらわれた。黒っぽい肌で、てかてか光る黒い髪をしている。
リーナはまた、グンナルの手をぎゅっとにぎりしめた。
「何にいたしましょう?」主人は歯を見せて、にっこりわらいかけてきた。
グンナルには、ママの手がきゅうに冷たくなるのがわかった。
買いものをすませて店を出ると、グンナルはふしぎそうにママの顔を見あげた。
店にはいったときとは大ちがいで、リーナは目をかがやかせている。品物のつまった大きなビニールぶくろをふたつぶらさげている。なかには、買うつもりのなかったものまではいっているらしい。トーレのすきな牛肉だけでないことはたしかだ。
「買いもののメモにあったのは……」グンナルはいいかけたが、ママのうれしそうな目を見て、それきり口をむすんだ。
仕事から帰ってきたトーレは、たいそうごきげんだった。リーナに花たばを買ってきた。これは、婚約以来はじめてのことだ。グンナルには、ジョギングシューズを買ってきた。

「みんなで、うまくやっていこう。おれも残業して働くぞ。そうしたら、春までに新しい車が買えるぞ」

「ブローテンの家を改築しようと思っていたのにね」リーナがつぶやいた。

トーレの顔が、いっしゅんくもった。けれど、すぐ気をとりなおしていった。

「よし、よし。何でもできるぞ。お望みどおりだ。ところで、お祝いのごちそうは、何かな？」

リーナは、小さいガスコンロでチキンのにこみ料理をつくっておいたし、ライスの用意もできていた。親子三人は、何も置いていないがらんとした台所で、丸いプラスチックのテーブルをかこんだ。

グンナルは、ほとんどごちそうに手をつけなかった。

「気分でもわるいの？　チキンは大好きでしょ？　どうしたの？」ママが気づかった。

「食べたくないんだ」グンナルは、目をあげずに答えた。

ママとパパは顔を見あわせた。パパは、あからさまにうんざりした顔をして、「この肉は店で買ったチキンだと思えばいいだろう」といった。

グンナルは、ちびちび食べはじめた。チキンは、かむうちに、口のなかでふくらんだ。そのとたんグンナルは、ひっこす前のあの日のことを、まざまざと思いだした。

あの日、グンナルが森から帰ってくると、ニワトリ小屋からおそろしいさわぎが聞こえてきた。森のキツネかミンクが、ニワトリ小屋にはいったにちがいない！

グンナルはぼうきれをにぎって、小屋にかけつけ、勢いよくとびらをあけた。なんと、なかにいたのはパパだった！　パパは血のついたおのをふりあげていた。頭のないニワトリが、パパの足のまわりで、バタバタとはばたいていた。

その光景が目にうかぶと、グンナルはもう何一つのどを通らなくなった。

「ごちそうさま」グンナルは、席を立った。

あの日、ニワトリ小屋のできごとのあと、グンナルは、さけび、ゆかをけり、かべをたたいて、いかりくるった。

パパは部屋へやってきてグンナルをなだめ、わけを説明し、長い時間かけてなんとか納得させようとした。ニワトリは町へつれていけないから、いずれ死んでしまう。それならばせめて、いちばんかわいそうでない方法をとってやるのがいいと思ったのだ、と。

その夕方、リーナが外出先から帰ってきたときも、グンナルは頭がいたいといって、部屋にひっこんでいた。

トーレは、食べる分だけのニワトリの羽をむしって、あとは納屋の後ろにうめた。

あの日のことなんか、思いだしたくなかった。思いだしちゃいけないんだ。

グンナルは、ドアをそっとあけて、台所の両親を見た。ふたりは何か話して、わらっている。

おの、パパのふりかざした重いおのは、下へ下へと落ちたんだ。重くなって、重い力となって。殺すっていうのはそういうことなんだ。そして、重い力を受けることが死ぬことなんだ。

グンナルはふいに、自分のからだが重くなるような気がした。足のうらがゆかにぐんぐんおしつけられていく。もう立っていられない。

グンナルは、その場にうずくまった。

そのとき、グンナルの耳に、かすかな音がとびこんできた。鳥の羽の音だ！　鳥の羽が窓を打ったのだ。

グンナルはぱっと起きあがり、窓辺にかけよった。

ハトが一羽、グンナルの目の前で、いっしゅん静止しているように見えた。だが、すぐに飛び去った。つばさを広げて、ゆうぜんと下へ飛んでいき、下の方に見える屋根に舞いおりた。

そこには天窓があいていて、まわりに数羽のハトが飛んでいる。ハトたちは、天窓のなかにすべりこんだかと思うと、また出てきて右に左に飛びまわっている。追いかけっこをして、ふざけあっているみたいだ。

グンナルは、ポカンと口をあけて見とれていた。すると、天窓(てんまど)から人のすがたがあらわれた。男の人だ。老人(ろうじん)だ。

老人は、目を細めて空を見あげた。そしてのどをのばし、首をまわして、上下左右をぐるりと見た。

グンナルは、うれしくなった。

あの人、鳥みたいだ！

老人は手のひらを上にむけて、うでをのばした。一羽(いちわ)がその手にとまり、天窓のなかにいれられた。なかは暗くて、グンナルからはよく見えない。

そうか！　あのハトは飼(か)いならされているんだ。あのおじいさんがハトを飼っているんだ！

グンナルは立ったまま考えた。

あそこにも鳥好(とりず)きの人がいるんだ。町の生活も、まんざら悪くないかもしれない。



2

何日かすぎて、ようやくグンナルは、ひとりで外へ出ることになった。グンナルはリーナのかわりに、パンにつかうイーストを買いに行くことになったのだ。

はじめてひとりで歩道に出てみると、何のことはない、不安どころか、かえって町に親しみさえ感じた。このあいだ道にたおれていた人は、もういなかった。うば車をおした若い母親が、バスを待っている。

グンナルは、道の反対側の家なみを注意深く見ながら、ゆっくり歩いた。そして、道のむこう側に、今にもくずれそうなアパートが建っているところまで来た。

一階はどの窓も、よろい戸がくぎづけにされている。二階と三階は、窓ガラスがぜんぜんなくて、窓のところが、ぽっかりとあいたままになっている。四階は……四階の窓にはカーテンがさがっているようだ。プラスチックの花まで置いてある。

ハトのおじいさんは、ひょっとしたら、あそこに住んでいるのかもしれない。

グンナルは道をわたった。若者がふたり、目の前を走りすぎていく。ふたりとも、やぶれたジーンズにごついブーツをはいている。そして、上着につけたかざりやくさりをじゃらじゃら鳴らしながら、その建物にはいっていった。

グンナルは入り口で、はいってみようか、やめようか決めかねていた。ふと四階を見あげると、屋根の上にハトが数羽あらわれた。

ハトは肩をよせあうようにして、高く高く舞いあがっていったかと思うと、またすぐに舞いおりてきて、屋根の後ろに消えた。

グンナルはハトの消えた方向を見た。四階の窓ガラスには、空がうつっているだけだった。グンナルはアパートの重いとびらに肩をもたせかけてぐんとおしあけた。

なかは、ごみとかびのにおいがした。ゆか一面に、ダンボール箱と新聞紙がちらかっている。かべ一面、らく書きでよごれている。ぼろぼろの寝袋が、天井のくぎからぶらさがっている。

階段を二階まであがると、みょうなにおいがしてきた。たばこだ。あまいたばこのにおい。すぐそこに若者の一団がたむろしていて、腰をおろしたり、ゆかにねそべったりしていた。そのうちのひとりが、いきなり立ちあがって、グンナルにむかって何かさけんだ。

グンナルは、うさぎのようにおびえて、上へ上へとかけのぼった。

やがて一つのドアの前に着いた。ドアのはめこみガラスがわれていて、かわりにカーテンがかけてある。表札には「ソフィーとマーチン・アンドレアセン」とある。

グンナルはしばらくそこにたたずんでいた。よびりんをおしたいのだが、なかなかおす勇気がでない。

やがて、上のほうで物音がした。音のするほうを見あげると、屋根裏部屋の戸が少しあいているのが見えた。グンナルは、足音をしのばせてのぼっていった。

屋根裏部屋のなかは暗くて、目がなれるまで何も見えなかった。グンナルは足をすべらせるようにして一歩前へ出た。ゆかがきしんだ。また一歩。

こうして、グンナルは暖炉の前を通りすぎた。

天窓からそそぐななめの光のなかに、金網の仕切りが見えた。

グンナルは、ゆっくりゆっくり近づいた。そして金網に顔をおしつけて、なかをのぞきこんだ。

そのとたん、グンナルは、心臓がとまりそうになった。目の前に大きな顔があったのだ。

老人の顔が。しわだらけで、白っぽいぼさぼさの口ひげをはやした顔が、まゆをよせ、まばたきもせず、うたがわしげにグンナルをにらんでいた。

「何をしようっていうんだ！」老人がことばを発した。声はあらく、ひややかだった。

「ハトが見たくて……」
「ふん！　ここにいるのは、ただのハトじゃない」
「訓練されたハトでしょ」
「伝書バトだ。手紙をはこぶハトだ」
「伝書バト」グンナルがつぶやいた。
　ふたりはそれきりだまっていた。
　老人の目から、けわしさがしだいに消えていった。グンナルを調べるように見ていたが、老人は、とうとう「それで、何の用かね」といった。
　グンナルはごくんとつばをのみこんだ。
「むこうのアパートから、あなたを見たんです。それからハトも。飼いならされたハトだってわかりました。それで、ハトを飼っている人がいるんだ、と思ったんです」
「こりゃおどろいた」といって、老人はにがわらいをした。「ここにハト小屋をつくって二十年になるが、わしのハトを見にきてくれたのは、坊主、おまえがはじめてだよ」
「いったいだれに手紙をはこぶんですか？」グンナルは、ハトにむかって、うなずいてあいさつをおくりながら聞いた。

老人は、さもおかしそうにたずねた。
「おまえには、手紙を出す相手がいないのか？」
グンナルは、ふりむいた。
「ぼくが手紙を出す人？　そんな人、いません」
それきり、ふたりともだまってしまった。長い沈黙。緊張のあまり、金網をつかんでいたグンナルの手が、しびれてきた。
ゆっくりと金網から手をはなして、グンナルは老人にたずねた。
「一羽ずつ、みんな名前がついているんでしょ？　何ていう名前ですか？」
老人は答えなかった。そして、一羽のハトをつかんで、足を見せた。アルミニウムの管がまいてある。
「自分で読んでごらん」
「数字しか書いてないけど」
「番号だよ。名前がなくても、番号で、わしにはわかるのさ。つまり、ハトの足でね」
「ハトの足？」
「ああ、足だ。聞こえなかったのかい？　どのハトの足にも番号がついていてな、それが名前のか

わりだ。どうだ。簡単明瞭じゃないかね？」
「ぼくのニワトリには、名前がついていました。どのニワトリにも」
「ニワトリだって？　アパートで？」
「今じゃありません。いなかにいたときです。みんな、名前がありました」グンナルはいくらか楽な気分になって、足をふみかえた。
「でもパパは、ニワトリを殺さなきゃならなかったんです。ここにつれてくるわけにはいかなかったから」
老人は、考えこむように、遠くを見つめて聞いていた。
「ニワトリはだめだ。アパートでは飼えないよ。せいぜい、カナリアってところかね」
それから、老人は「どうだい、ハト小屋にはいってみないか」とさそった。
かんぬきがはずされ、金網のドアが細くあけられた。グンナルは、すべるように小屋にはいった。と同時に、ハトがいっせいにはばたく音がした。グンナルは、びっくりして立ちつくした。
しだいにハトたちは、おちつきをとりもどした。
グンナルはあたりを見まわした。部屋の片側は、こまかく仕切られた鳥かごになっている。とまり木や梁に、ハトが二羽ずつとまっていて、たがいにつっつ いたり、羽をなでたりして、クークー

鳴いている。

「二羽ずつだ！」

「そうだよ。つがいだ。おすとめすだ。わかるかい？」

「わかります。ぼく、赤んぼうじゃないんだから」ちょっとむっとして、グンナルがいいかえした。

「でも、ひなは？　どこにも見えないけど」

「今は、もうおそいんだよ」

「おそいって？」

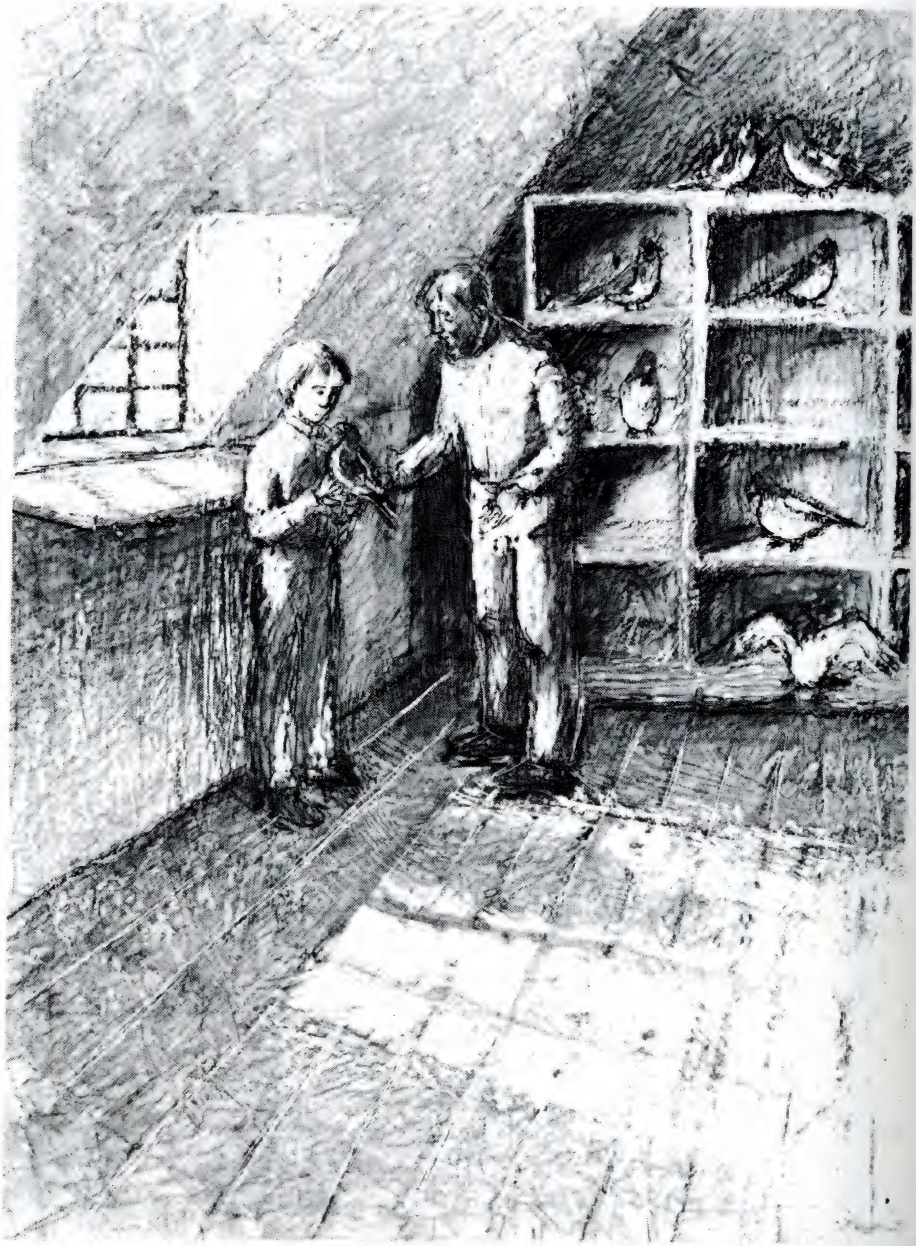
「今年はもう生まれないのさ」

　老人はそれきり、また長いこと、だまっていた。そして、後ろをむいて、格子じまのハンカチで鼻をかみ、何か、もごもごいっていた。やがて「名前のついているのもいるんだよ」といって、天井の梁にとまっていたハトを手にとった。

「これはブローマン。この部屋の父親だ。ここにいるのはみんな、ブローマンの子どもたちだ。それから、あそこにいるのが、ブローマンの奥さんのグルドッカだよ」

　グンナルは、グルドッカに手をのばした。のどと胸が金色に光っている。

　グルドッカは、グンナルを見て、いっしゅん目をつぶり、首をかしげて、とびのいた。



「知らない人だからだよ。ハトも知らない人をこわがるのさ。さあ、おいで、ブローマン、ごあいさつだ。坊主、おまえ、何て名前だい？」
「グンナルです。グンナル・ブローテン・オルセンです」
「ブローテン・オルセン？」
「ぼくたち、ブローテンから来たんです。だから、ママは名前にブローテンっていれるんです」
ようやく、グンナルは、ハトを手にとることができた。あたたかくて、やわらかい。ハトも今では、安心したようにグンナルを見つめている。
「ブローマン」グンナルはつぶやいた。
「ブローマン、いい子だね」グンナルは、なめらかなハトの胸に顔をおしあてようとした。するといきなり、鼻をつつかれた。グンナルはびっくりして手をはなした。
ブローマンは、ばたばたと天井の梁にもどった。そして、いばったように行ったり来たりしながら、グンナルを見おろし、首をかしげて、白いかたまりを落っことした。
「おい、だめだよ。ブローマン。おぎょうぎの悪い子だ。わしを守ってくれるつもりなんだね。よしよし、あいかわらず、気が強いな」
ふたりが階段に出て、老人が屋根裏部屋の鍵をしめると、グンナルがきいた。

「マーチン・アンドレアセンって、あなたですか？」
「もちろん、このわしだ。しがないじじい、退職した金属職人さ。ソフィーは二年前に死んだ。それからはひとりぐらし。ソフィーには、気のどくだった。ソフィーはハトにうんざりしていたよ。わしは仕事をやめてから、居間にいるときより、屋根裏部屋にいるときのほうが多くなってしまったからね」
ふたりは、階段をおりて、四階の部屋の前で立ちどまった。マーチンが、鍵あなに鍵をさしこんだ。
「ひとりぼっちで、さびしいでしょう？」グンナルが、おずおずとたずねた。
マーチンは、手をとめた。
「そりゃあ、ソフィーがいるときのようにはいかないよ」
マーチンは乱暴にせきばらいをして、グンナルをまじまじと見つめ、「坊主、ちびのくせに、なかなかいいやつだ。ちょっとよっていかないか？」と、さそった。
グンナルはちょっと肩をすくめた。
「おはいり。パンをひと口どうだね？　わしが自分でやいたんだ。このごろは、必要なことしかしないのさ。おはいり。腰ぬけ野郎でなかったらな！」

老人の部屋は、みょうなにおいがしていた。ほこりのにおい。古着のにおい。肉をやいたにおい。玄関のかべぎわには、小麦粉やとうもろこしのふくろがならび、新聞紙がつみあげてある。台所の流しには、洗いものがつけたままだ。

「必要なときだけ、いそいでやるのさ」

マーチンは机の上の物を片すみへおしやって、ふたりの場所をつくった。

「ジャムがいいかな、それともチーズか？　まあ、好きなようにしてくれ」

マーチンお手製のパンは大きくてやわらかく、粉とシロップの味がした。

マーチンはときおりハトのことを話した。

グンナルは自分の知っている鳥のことを話し、しまいに、鳥の鳴き声をまねしてみせた。

マーチンはアトリやシジュウカラのことはよく知っていたが、カケスのことは、あまりよく知らなかった。タカとワシのことなら、おどろくほどくわしかった。ハトをおそうやつらだから。

何時間そこにいただろう。

老人のアパートを出たグンナルは上きげんで道をかけだし、鼻歌をうたいながら八階のわが家へとんで帰った。

パパとママに話さなくっちゃ。きっと、よろこんでくれる。ふたりとも、ぼくは人間ぎらいで、

友だちがつくれないと思いこんでいるんだ。ぼくにだって友だちができたんだって、はっきり伝えなくっちゃ。

玄関のドアはなかばあいていた。グンナルは立ちどまって耳をすました。ママが電話で話している。

ドアのすきまから、パパが見える。

あれ、パパがもううちへ帰ってきている。まだそんな時間じゃないのに。そんなにおそくまで、外にいたわけじゃないのに。

「はい、十歳です。かみの毛は濃いくり色です。背は高くありません。目は父親似で茶色です。いいえ、いいえ、その子とはちがいます。……どうもありがとうございました。どうも！」

リーナは受話器を置いて、ふりむいて、トーレを見た。

グンナルにも、ママの顔が見えた。泣いている。

「まあ、おちつきなさい」パパはいらだっている。「おつかいに出たんだね。じゃあ、きっとついでに公園まで行ったんだろ」

「すぐ帰るっていって出たのよ！　すぐ家にもどるって。トーレ、町はあぶないのよ。とくにグンナルみたいな小さい子には……」

トーレは、どうしようもないとでもいうように両手を広げた。

「そうかい。だったら、リーナ、おまえが自分でさがしに行くことぐらいできただろう。何かというと、すぐにおれのところに電話すればいいと思って！」

グンナルは、勇気を出して家のなかにはいった。

「どうかしたの？」

「まあ、グンナル！　無事だったのね！」

リーナはその場にひざをついて、グンナルを両腕にだきしめた。

「いったい、どこへ行ってたの？　なぜすぐ帰ってこなかったの？　すぐ帰ってきてちょうだいって、あれほどいったのに……」

「どこへ行ってたんだ！」パパがさけんだ。

「外だよ」と、グンナル。

「だめじゃないか。ママをこんなに心配させて。ここは村とちがうんだ。わからないのか。ここでは、気をつけなきゃいかんのだ。そんなことがわからないで、どうする！」

グンナルは、どなられてかえってほっとした。

「パパはいつもいってたでしょ。ひとりで家にこもってばかりじゃいけないって。ぼく、今日、友

だちができたんだよ。マーチンっていう名前なんだ。ぼくたち、ぐうぜん出会って、話をしたんだ。友だちと話ぐらいしたっていいだろう？」

「そうだったの、グンナル。でも、それならそうといってくれなきゃ。帰ってこないから、ママ、とても心配したのよ」

「心配することなんか、何もないのに。パパもママも、ぼくに友だちができて、ちょっと遊んだだけで、大さわぎするんだから。あのね、その友だちね……」

「グンナル！　親にむかって、なんていいぐさだ！　リーナもリーナだ！　もう、おまえたちにはうんざりだ！」

グンナルは、自分の部屋にかけこんで、後ろ手にばたんとドアをしめた。

そんなのないよ。ふたりともかってに大さわぎして。ぼくが、やっと……。そんなのないよ！

玄関は静かだった。

「まったくあいつは、おまえにそっくりだよ」パパの声が聞こえてきた。「町へ来たんだから、まともにやってもらいたいね！」

グンナルは、あとずさりして、窓にぶつかった。もうこれ以上何も聞きたくなかった。

耳をふさいで、窓から外をながめ、屋根のつらなりをぼんやりと数えた。

カモメが一羽飛んできた。たなびく夕もやをつきぬけて、カモメは高く高くのぼっていき、夕日にうかぶ金色の露のように光った。

グンナルは、自分のからだが、まわりのものからどんどんはなれていくような気がした。いつのまにか鳥になって、風を切りながら、カモメといっしょに、はてしなく広がる静かな空へすいこまれていくような気分になった。

3

日曜日の朝は、パパもママもおそくまでねむっている。ブローテンのいなかにいたときは、グンナルにとって、それもまた悪くなかった。いなかでは、ひとりで外に出て、好きなことができたから。

いなかでは、ニワトリにえさをやり、水をとりかえ、小鳥の巣箱を調べ、枝に巣をかけた小鳥たちのようすを見てまわり、つる草ののびぐあいを調べたりしていた。だが、町なかのアパートでは、何にもすることがない。やってみたいことすら、思いうかばないのだ。

グンナルはベッドに腰かけ、足をぶらぶらさせながら、ぼんやり、ゆかを見つめていた。アパートの建物は、しいんと静まりかえっている。

きっとまだみんな、ねむっているんだろう。いまごろ起きてしまうようなまぬけは、ぼくだけなのかもしれない。

グンナルは立ちあがり、窓からマーチンのアパートを見おろした。そこでも、何ひとつ動くよう

すはなかった。

だが、しばらく見ているうちに、天窓の下で、何かが動いた。つづいて天窓がひらいて、白くて大きなたまご形のものが、ぬっとあらわれた。はじめはそれが何だか見当もつかなかったが、見ているうちにわかってきた。マーチンの頭なのだ。オートバイ用の白いヘルメットをかぶったマーチンの頭だ。

マーチンはヘルメットをもちあげ、風むきを調べていたが、ひょいとグンナルの部屋のほうを見あげた。

グンナルはいそいで窓をあけて、手をふった。

マーチンはグンナルに気がついて、手をふってこたえた。

「ハトをはなしに行くよ。いっしょに来ないか？」

声は建物にぶつかってこだました。

グンナルは「行くよ！」とさけびたかったがじっとこらえて、そのかわりに、大きくうなずいた。

グンナルはそっと両親の寝室にしのびこんで、パパを起こした。パパはようやくうつろな目をあけ、頭を起こしてグンナルを見た。

「ぼく、ちょっと、マーチンのところへ行ってくるね」

パパは目をしばたたき、考えごとでもしているかのように、何かつぶやいた。それから、ふたたび頭をまくらにしずめた。

パパにことわったから、これでだいじょうぶ。グンナルはおちついて、足音をたてないように気をつけて、部屋を出た。

数分後に、グンナルはマーチンの三輪オートバイの荷台にすわっていた。グンナルのわきには、ハトのはいったかごが二つ置いてあり、なかで、ハトがクークー鳴いていた。

「興奮してるんだよ。こんな早い時刻につれだしたことはないからね」

マーチンはそういいながら、ジャンパーのえりくびまでファスナーをあげ、ゴーグルを目の位置におろし、大きな手ぶくろをはめた。頭は、すっぽりヘルメットにかくれている。

「かっこいい！」グンナルはわらった。

マーチンは聞いていなかった。だまったままペダルを思いきりふみおろすと、エンジンがかかった。

エンジンが大きな音をたててうなりはじめた。マーチンは姿勢を正し、クラッチをゆるやかにはなした。オートバイは排気音を連続させて歩道を横ぎり、道に出るとすぐ右にまがり、静かな日曜日の町を走りだした。

マーチンは道をよく知っていた。せまい道路を上手に走りぬけ、電車の線路をごとごととわたり、ごちゃごちゃした交差点を、腕で合図をしながら、右に左にまがった。老人の運転するオートバイを、あざわらうように追いぬいていく車があると、マーチンはこぶしをふりあげて、いかりのさけび声をあげた。

しだいに、ながめがひらけてきた。住宅街から教会の墓地を通りすぎ、高層アパート群をぬけると、はてしなくつづく畑地へでた。

マーチンはブレーキをかけ、エンジンをとめて、オートバイをおりた。

「ここでよし」とつぶやいてから、マーチンはグンナルによびかけた。「さあ着いたよ。手をはなして出ておいで」

グンナルもオートバイからおりた。手すりにしっかりつかまっていたので、指はしびれ、からだは寒さでかたくなっていた。

畑は、切り株がならんでいて金色のじゅうたんのようだった。秋の耕作がはじまる時期で、トラクターが一台、日曜日の朝の光をあびて、畑のまんなかに置いてある。

鳥の群れが、広い空を縦横に飛びまわっている。カラス、ハト、それからカモメだ。ときどき高く舞いあがっては、畑のむこうへまわっていく。町のほうからは、べつの群れが高く飛んできて、

音もなく森のほうへ飛び去る。
「こんなところでハトをはなしたら、野バトといっしょに行ってしまうんじゃないかな」
「ばかいっちゃいけないよ。そんなことはないさ」マーチンは鼻でわらった。「あの連中はあの連中で、いっしょに育って大きくなったんだ。よそ者なんか受けいれないよ」
「じゃ、学校とおんなじだ」
マーチンはハトのかごに手を置いたまま、グンナルを見つめた。
「そんなふうに考えちゃいけないよ。鳥と人間とはちがうんだ」
マーチンとグンナルは、かごを一つずつ地面におろした。足のうらにあたる土は、やわらかかった。わらの切り株が、すねをこすった。
「本当にハトたち、うちへ帰れるの？」
「ああ、帰れるとも。ここからならだいじょうぶだ。ここへは、みんなをつれてよく来たよ。何度もな」
マーチンはかごからはなれて、頭をのけぞらせて、風むきをねんいりに調べた。
「うん、すばらしい飛行びよりだ」
グンナルもまぶしそうに青空を見あげて、うなずいた。

「うん、今日ならよさそうだ」

「グンナル、おまえがハトをはなしてごらん」

グンナルはうつむいて、ピンをはずしてかごをあけた。

ハトたちはいきなり明るいところに出て、目をぱちくりさせていたが、やがて一羽が飛び立った。

するとすぐに、みんながあとを追っていっせいに飛び立った。

グンナルはいっしゅん、はばたくハトの灰色の雲にかこまれ、思わず顔に手をあてた。

手をはなして見あげると、ハトの群れは一かたまりになって飛んでいた。つばさの先をふれあわせるほどに、ぴったりくっついて飛んでいる。先頭の一羽が方向転換すると、すかさずみんながあとを追った。

やがて、ハトの群れはぐんぐん高く飛んでいき、明るい空にうかぶ、黒っぽい点となった。

グンナルは心配になった。

「町はあっちじゃないのに」

マーチンは、ふふっとわらった。

「いいんだよ。少しは遊ばなきゃ」そして、一呼吸おいて、つぶやいた。「これで最後。こうしてはなしてやれるのも、これが最後だ」



しばらくすると、ハトたちがもどってきた。そして小さな輪をえがいた。もう一度輪をえがいたかと思うと、こんどは方向をさだめて、町のほうへまっすぐに飛んでいった。つまり、マーチンのアパートのハト小屋めざして。

グンナルはほっと胸をなでおろした。それと同時に、ハトたちが去ったあと、畑のなかにひとりで、とりのこされたような気がした。

いや、マーチンもいる。

大空の下、はてしなくつづく畑にマーチンとグンナルのふたりだけだ。

グンナルのまわりには、ハトがかごからいっせいに飛び立ったときの羽音が、まだのこっていた。できることなら伝書バトの飼い主になりたい、グンナルはそう思った。伝書バトの飼い主。ハトがしたってくれる飼い主、ハトがいつでも帰ってきてくれるような飼い主に。そうしたら、自由に飛びまわらせてやろう。

グンナルはマーチンのほうをむいた。

「さっき、最後っていったでしょ。どうして最後なの？」

マーチンは顔をそむけた。たばこの葉を紙にくるくるとまきはじめ、できあがった紙まきたばこを、長いことじっていた。しばらくして、たばこに火をつけた。

「ハトも、年をとってきたからさ」
「若(わか)いのもいるよ。ブローマンとグルドッカは年をとったかもしれないけど。あの二羽(にわ)はだめでも、あとのハトたちは、まだ飛(と)ばせてやれるじゃない」
「ブローマンとグルドッカだけとじこめておけっていうのか？」
「ちがうよ……」グンナルは口ごもった。「そうじゃなくて……」
「ハトは飛ぶように生まれついてるんだ。とじこめておくわけにはいかん！」
「そりゃそうだと思うよ。じゃ、時間をかぎって、たとえば、一日に三十分だけとか、それも、何回にもわけて、ときどき出してやるようにするとか……」
　マーチンは、だまってたばこをふかしていたが、いきなりさけんだ。
「知りもしないことを、ごたごたいいおって！　うるさいぞ、坊主(ぼうず)！」
　マーチンは、うつむいてかごのふたをしめた。きしんだ音がした。そして、グンナルをふりむきもしないで、大またに歩いてオートバイにもどった。
　その夜、グンナルはよくねむれなかった。一晩(ひとばん)じゅう、グンナルは、ハトのはばたく音にかこまれているような気がしていた。ハトたちのまんなかにいながら、かごがあかず、どうしても飛び立

たせてやれない夢を見た。

そのせいか、グンナルはびっしょり汗をかき、朝食のテーブルについたときには、ぐったりつかれていた。グンナルはおはようともいわずに、しずみこむように、いすに腰をおろした。

ママが、コーンフレークと、ミルクとジャムをならべてくれたが、自分のおさらにとりわける気にもなれなかった。

トーレはグンナルのようすをじっと見ていたが、すっと、コーヒーカップをおしやって、いった。

「グンナル、今日から学校へ行きなさい。もう、これ以上ぐずぐずしてちゃだめだ。友だちのなかへはいっていけなくてどうする！」

すかさず、リーナが台所から答えた。

「いきなり、そんなことといったって……」

「これ以上待って、どうする！」トーレはテーブルをどんとたたいた。「男の子ってのは、家のなかにとじこめておいちゃいけないんだ。リーナ、聞こえてるか。とにかく部屋にばかりいないで、学校へ行くんだ！」

トーレはグンナルを見つめ、それからリーナのほうを見た。だが、リーナは台所仕事の手を休めなかった。

グンナルは、おさらに目を落とした。

その日リーナとグンナルは、学校の鉄の門をくぐった。ふたりの前には、だだっ広い空間があった。建物にかこまれた広い空間、さけび声やわらい声が、かべにひびく空間があった。

七年生(中学一年生)ぐらいの男の子たちが大声をあげ、わらいながら、ふたりの前をかけていった。女の子を追いかけているのだ。女の子は、悲鳴をあげたかと思うとわらい、わらったかと思うと悲鳴をあげて、にげまわっていた。

グンナルの手から、リーナの手がそっとはなれた。

リーナは、グンナルのせなかを軽くおしながら、いった。

「さあ、お友だちがたくさんできるわよ。だいじょうぶよ。担任の男の先生は、とてもいい方よ。安心しなさい」

しかし、教室にいたのは女の先生だった。金髪の小がらな女性が、教卓のわきにいた。

リーナがグンナルのことを話すと、まだ学生のような女の先生は顔を赤らめてうつろな笑顔をグンナルにむけたが、グンナルの目をはっきり見ようとはしなかった。

一時間目がはじまった。

グンナルは、クラスのざわめきのなかで、ひとりとりのこされたように、ただじっとすわってい

た。消しゴムと紙きれが教室を飛びかった。
先生は教壇の上でせきばらいをし、それから大声をあげ、はさみで教卓をたたいた。それでも、さわぎはおさまらなかった。

休み時間になった。

グンナルはごみ箱の置いてある、校庭のすみのほうへ歩いていった。だれも話しかけてこない。それどころか、だれもグンナルを見ようとさえしなかった。まわりで、みんなはゴムとびや鬼ごっこや、ボール投げをしている。ボールがグンナルの足元へころがってきた。

グンナルは、ひろってあげようとかがんだ。そのとたん、「さわるな！」と、ボールの持ち主がさけんだ。グンナルはあわてて立ちあがった。

そこでベルが鳴り、グンナルのまわりは、とたんに静かになった。最後の生徒が校舎にはいって、戸がしまった。とうとう、グンナルは校庭にひとりぼっちになってしまった。グンナルは、くるりと後ろをむいて、校門を出た。

それからの二時間、グンナルは通りを歩きまわってすごした。そのうちに公園を見つけたので、なかにはいって、ベンチにこしかけた。昼食のパンは、ジャンパーのポケットにはいっている。グ

ンナルは昼食を食べ、最後のパンの半きれを、一羽のスズメに食べさせた。スズメはだんだんなれてきて、グンナルの足のあいだにはいってくるようになった。

こうして数日がすぎた。

グンナルは毎朝、学校へ行くふりをして家を出る。そして、見おくっているママの目のとどかないところへ来ると、すぐに右へまがって、公園へはいった。そして学校の終わる時刻まで、公園ですごした。

グンナルは小鳥やリスと話をしたり、ひとりごとをいったり、スズメにパンをやったり、じっとすわったりして時間をつぶした。

だが、いつものんびりできるわけではなかった。浮浪者におどかされることもあったし、老婦人たちに、いぶかし気な目つきで見られることもあった。そんなときグンナルは、公園の反対側にまわって、あいているベンチをさがすのだった。

午後になると家へ帰り、自分の部屋にはいった。机の上に教科書を広げ、ママが部屋へ来ると、女の先生は教えるのがひどくへただとか何とか、まじめな顔をしてうったえた。そして、ママがドアをしめて行ってしまうと、窓にしのびよった。

グンナルは根気よく、あの天窓を見おろしつづけた。だが、マーチンもハトも、いっこうにすがたをあらわさない。天窓はしまったままだ。ときたま屋根の上を、二、三羽のハトが飛ぶことがあったが、たぶん、ほかのハトだろう。

ある日、どしゃぶりの雨になった。公園にいたグンナルは、大きな木の下で雨やどりをした。それでも、二時間もそうしているうちに、からだはぐっしょりぬれ、寒さでがたがたふるえてきた。

そのとき、ふいにマーチンのことが気になりだした。

マーチンの身に、何か起こったのかもしれない。とにかく、マーチンのうちへ行ってみよう。

グンナルは、こぶだらけの幹からはなれて、公園を出た。

マーチンのアパートの一階の入り口はあけっぱなしになっていて、階段が見えていた。

グンナルは、足早に階段をのぼった。だれにもよびとめられず、とがめられることもなかった。

とうとう、マーチンの部屋の戸口に着いた。

グンナルは大きく息をして、呼吸をととのえた。部屋のなかは暗い。暗くて、何の音もしない。

死んでしまったのかもしれない。

グンナルは勇気をふるいおこして、ベルを鳴らした。何の応答もない。もう一度ベルをおした。何の音も返ってこない。グンナルはドアに手をかけた。ドアはすべるようにあいた。

入り口のゆかに、おくの部屋から一すじ細い光がさしている。

グンナルはしばらくそこに立っていた。それから、一歩なかにはいった。また、一歩……。そして、かすかにひらいている部屋のとびらの前まで来て、立ちどまった。

グンナルは、自分の目をうたがった。戸のすきまから見えた部屋は、まさに、おとぎ話の宝物の部屋だった。宝物がきらきら光っている。目がなれてくると、光っているものが、一つ一つはっきり見えてきた。優勝カップと、金ぶちの額と、彫像と賞状が、かべ一面にならんでいるのだ。

銀製品にかこまれ、ランプの強い明かりにてらされて、マーチンは新聞とぼろきれのなかにすわっていた。両手で、銀の鉢をもちあげた。しばらくみがいてないのだろう、光を失っている。マーチンは、それを一度わきに置き、聞こえるほど大きなため息をついて、ぼろきれを手にとった。だが、みがきはじめはしなかった。

きゅうに、マーチンは頭をたれて、あごを胸におしつけた。顔がゆがんでいる。苦しいのだろうか。泣いているのだろうか。

どれくらい長いこと立ちつくしていたのだろうか。グンナルは、とつぜんくしゃみがでそうになった。鼻をおさえてとめようとしたが、だめだった。とっさにグンナルは、玄関へもどろうとして、向きをかえた。しかし明るい光を見ていた目には、玄関はまっ暗で、何も見えない。

グンナルは何かにけつまずいて、どしんと音を立ててゆかにころがった。
「だれだ！」ものすごい声がした。「出ていけ！　うすぎたないこそ泥め！」
ドアがぱっとあいて、光がグンナルをてらした。
マーチンはグンナルのえり首をつかんで、ならず者をののしるような、ひどいことばをなげつけた。まともな人なら聞くにたえないほどのことばだった。まもなくマーチンは、自分がつかまえた子どもの顔を見て、びっくりした。
「おまえだったのか！」マーチンは手をはなし、頭と目をハンカチでぬぐった。
「おまえだったのか、坊主。わしは、てっきり……。いったい、今までどうしてたんだい？」
「学校。もう学校へ行かなきゃいけないって。どうしても行けっていわれて」
マーチンは、まじまじとグンナルを見つめた。
「なんだなんだ。ぬれねずみじゃないか。服をおぬぎ。かぜをひくといけない。さあ、はやく」
グンナルが、マーチンの台所のテーブルについたのは、これが二度目だ。この前のときのあのフライパンに、いためたソーセージがはいっている。このあいだのコップもある。
グンナルは片手で、香水のにおいのするピンク色のバスローブの前を合わせ、もう片方の手で、

ジャムをつけた厚切りのパンをたいらに持って、口へはこんだ。
マーチンがコーラをついでくれた。
「おまえのために買っておいたんだよ。またきてくれると思ってね」
少ししてからグンナルは、気になっていたことをたずねてみた。
「どうしてこのごろ、ハトを外へ出してやらないの？」
「外へか。屋根裏に出してやってるよ」
「でも、外へ出て、思いっきり飛ばなくちゃ！」
「ハトもわしも…わしらは、もうじゅうぶん飛んでしまったってことさ。もう、たっぷりとね」
「ぼくには、ぜんぜんわからない」グンナルは、あきらめたようにつぶやいた。
「いやあ、わしらのような者には、生きている場所がないってことなんだ。コンクリートと自動車だけではわしらは生きていられないのさ」
マーチンは、すわろうともしないで、考えこんでいたが、やがて、グンナルの目をじっと見つめた。
「この建物はとりこわされるんだ。それだけのことさ。おいぼれといっしょになくなるのさ」
「それじゃハトは……？」
「みんな、どこかへ行かなきゃならんのさ。好きこのんでひっこすわけじゃないんだ。わしらは、

追いだされるんだ。力ずくでな」
「屋根裏部屋も天窓もなくなっちゃったら、ハトたちのいるところがないじゃない。もどるところがなくなったらどうなるのさ！」
マーチンは、顔をそむけた。何かいおうとしていたが、マーチンのくちびるからはとうとう、一言もことばが出なかった。
「そうだ、マーチンのひっこすところへ、ハトたちもひっこせばいいんだ」
マーチンは、グンナルのことばを聞いてわらった。
「そうできりゃいいだろうよ。みんながわしを、ハトといっしょに大歓迎してくれればな。ところが、グンナル、だめなんだ。わしひとりをようやっと受けいれてくれる場所しかないんだ。かわいそうなハトたちは、いっそのこと……」
「ぼくがもらうよ」
「そうかい。クリームソースでめしあがるか。新ジャガとコケモモのジャムをそえてね。ふん、ハトが好きかい。ライチョウよりずっとおいしいっていうんだろう。これほどおいしいものはないってね！」
「やめて！」

マーチンはびっくりしてグンナルを見つめた。
「おねがいだから、ハトを殺(ころ)さないで！」
マーチンはため息をついて、うなずいた。もう一度うなずいた。
「わかったよ、坊主(ぼうず)。じゃ、売ることにするよ」
「ぼく、てつだうよ。新聞に広告(こうこく)を出そう。ぼくが書く」
「たぶん、ブローマンとグルドッカをほしがるやつは、ごまんといるだろうな。だがね、あの二羽(にわ)は年をとってるから、今さら、ほかの場所には住めないんだよ」
「ほんとにひっこすつもりなの？」グンナルは、マーチンの顔を見つめた。
マーチンは答えなかった。聞こえなかったのかと思ったが、そうではなかった。やがて、マーチンの下くちびるがふるえはじめた。
「そんなふうにいってくれる人は、今までひとりもいなかった。わしが何を考えているか、気にかけてくれる人なんか、ひとりもいなかった。わしは、この建物(たてもの)に四十年くらしている。ハトは、わしが小さいときから飼(か)っていた。そのわしから、ハトをとりあげたらどうなるのか、考えてくれる人なんか、ひとりもなかった。こんなひどいことって、あるかい？　こんな非人情(ひにんじょう)な話ってないだろう……」

4

その晩、グンナルが居間にはいると、パパとママはテレビを見ていた。グンナルは、いきなりテレビの前に立ちはだかった。
トーレはいらいらしながら、いった。
「どうしたんだ。どきなさい。テレビが見えないじゃないか」
グンナルはどこうとしない。
「おねがいよ、グンナル、どいてちょうだい」リーナがいった。
「パパとママに話したいことがあるんだよ」
トーレは、ため息をついた。
「あと十分待ちなさい、この番組が終わるから。ハンス・ホイヘットは待っちゃくれないんだから」
「今すぐ、聞いてもらいたいんだ」
「どうしても、今話したいらしいわね」リーナがため息をついた。

そこで、グンナルは話しはじめた。建物がとりこわされること、マーチンがひっこさなければならないこと、ハトたちのいるところがなくなることを。

「ハトをここへつれてきてもいいでしょ。ぼくの部屋へ」

「なんだって？」トーレがとびあがった。

「いいハトたちだよ。ぼくがめんどうをみるから。ぼくひとりでやるから」

「だめだ。それくらいのことが、おまえにわからないのか、グンナル。ハトをおまえの部屋にだって？　ばかをいうのもいいかげんにしろ！」

「でも……」

「だめだ！」トーレはテーブルをたたいた。コーヒーカップがおどった。「もう、その話はやめだ」

「グンナル、あなただって知ってるでしょ？　アパートでハトを飼うのは、禁止されてるのよ」

「屋根裏部屋でも、だめ？　地下室は？　屋上でもいいよ」

「だめだっていったら、だめだ」トーレの顔は、いかりでまっかになった。「そんなこと、二度というんじゃない！」

リーナは、立ったまま、グンナルとトーレの顔を、かわるがわる見つめた。

「セキセイインコを買ってやったらどうかしら……」

「マーチンって子には、ご両親がいるんだろう。その両親が考えればいいんだ。われわれ他人が、あれこれ口だしすることじゃないよ。自分たちで、ハトの飼える場所をさがせばいいんじゃないか」
パパのことばを聞いて、グンナルはなぜか気分がおちついてきた。そして、はっきりいうことができた。
「ぼくは、ぜったいにハトを死なせたくないんだ！」

日曜日の午後、マーチンのアパートの前にワゴン車がとまっていた。運転席にすわっているのはトーレだ。助手席にはリーナがいる。ふたりは、グンナルたちを待っていた。
リーナは、わすれものはないかと、持ちものを調べている。魔法びんはちゃんと二本用意してある。一つには大人のためのコーヒーが、もう一つには、子どもたちのためのココアがはいっている。あたたかい服の用意もととのっていた。
「ドライブに行くのって、やっぱりいいわね。ずいぶんひさしぶりだわ」
トーレはそれには答えずに、今にもくずれ落ちそうなアパートの正面を見ていた。
「いったい、どういううちの子なんだろうね」
「ごくふつうの子に決まってますよ。グンナルにお友だちができたのよ。うれしいわ。おまけに、

そのお友だちを助けようとしているんですものね。やっぱりグンナルはやさしい子なのよ」

グンナルが外にでてきた。緊張したようすでいる。

「グンナルのやつ、ぼくらに何をさせようとしているんだろう。さっぱりわからないね」トーレがつぶやいた。

そこへ、マーチンがやってきた。格子がらのフランネルのシャツに、ジャケットを着て、ネクタイをいじりながら歩いてきた。かみの毛はさか立っている。ちょっとまぶしそうに空を見あげた。

「あれはだれなの？」

リーナはグンナルとマーチンの顔を、かわるがわる見くらべた。

グンナルはそれには答えず、だまって自動車のドアをあけて、マーチンを後ろの席におしこんだ。

「まあ、いっしょに行くのは、男の子じゃなかったの？」そういって、リーナは顔を赤らめた。

「はい、まあ、男の子の年をとったやつでして、マダム」マーチンは自己紹介のあいさつをした。

それきり、車のなかに沈黙がつづいた。

しばらくして、トーレが口をひらいた。

「新しい家主のところへ何か調べにいくのだという話でしたが……どうやら、何か思いちがいをしていたようですな」

「パパ、行くって約束してくれたじゃないか」グンナルがいった。

マーチンは、前の席のふたりを見ていたが、「ごめいわくなら」といって、ドアをあけようとした。

「いいえ、べつに」トーレはそういって、車のギアを入れ、クラッチをはなした。「あなたじゃないんですよ。あなたの友だちがね、われわれをちょっとばかり、だましたんですな」

トーレはバックミラーで、グンナルの目をとらえようとした。

マーチンも首をまわして、グンナルを見た。

「どうやら、そうらしいですな」

「ぼく、どうしてもてつだいたかったんだ」と、グンナルはおとなしくつぶやいた。

老人ホームは、二階だての、長い建物だった。玄関はガラスばりで、その上に大きなテラスがはりだしていた。

「老人ホームか！」トーレはあきらめたように頭をふった。「これで何もかも読めたよ」

グンナルは、いそいで車をおりた。

「ここなんだ。みんなおりてよ。あっ、マーチン、ベランダがあるよ。あそこなら……」

「けっこうだね」トーレがにがにがしげにいった。「これほどすばらしい思いつきはないだろうよ」

事務長が、ホールで四人を出むかえた。背が高く、からだは骨ばっていて、かみの毛をオールバックにしている。歯のきたない男で、化繊のズボンをはき、手には大きなノートを持っていた。事務長は、みんなと握手したあと、マーチンの肩に手をのせて、とりわけ大きな声でいった。

「ご家族のみなさまといっしょに来てくださって、光栄です」

「わたしらは家族じゃありません」と、トーレがいった。

「ぼくたち、マーチンの友だちなんです」グンナルがあわてていった。「マーチンは、こまってるんです。だから、ぼくたちがいっしょにここへ来てみて……」

「近ごろは、ここへはいるのも、たいへんなんですよ」事務長が話しはじめた。「希望しても、はいれない人がたくさんいるんです。ですから、あなたは幸運なんですよ、アンドレアセンさん。あなたの居場所は、とにかくわたしたちが確保しましたからね。率直にいいますとね、あなたは医者から、とっても悪いという診断書をもらっていらしていますが、それがよかったんです。どうぞ、こちらへ。あなたのお部屋へご案内しましょう」

グンナルは事務長に近づいて、いいかけた。

「じつは、マーチンは……」

「シーッ、大人の話に口をだしてはいけません」リーナが横から、すばやくとめた。

みんなは、ひとかたまりになって、長い廊下を歩いた。とじられたドアのならぶ廊下に出ると、肉のスープと洗剤のにおいがした。

「みなさん、どこにいらっしゃるのでしょうね」リーナがささやいた。

「ご老人たちは、ちょうど今、お昼寝をしているんですよ。みなさん、お昼寝がとてもお好きなので。たしかに体が休まりますからね」

そうこうするうち、たぶん、マーチンのはいる部屋に着いたのだろう。事務長はドアをノックして、返事を待たずになかにはいった。

部屋は、午後の日ざしでいっぱいだった。暗い廊下を歩いたあとなので、とてもまぶしい。

やがて、ふたり部屋だということが、グンナルにもわかってきた。ロッカーも、いすも、電気スタンドも、本だなも、みんなふたつずつ置いてあった。

ベッドのひとつに、ひからびたかんじの老人が、かさね着をして、毛布にくるまってねていた。頭をもちあげることすらできない。

事務長は、今度は、さらに大きな声で、老人の胸をさすりながら話しかけた。

「新しいお友だちですよ、イエンセンさん。この方はマーチン・アンドレアセンさん。おふたりとも、あいさつをしてください」

マーチンが近よると、イエンセンさんは、めんどうくさそうに、毛布から手をもちあげた。マーチンはその手をとったが、またすぐにはなした。

グンナルはその老人を見た。呼吸が速い。呼吸のたびに上下するやせた胸が、ほんとうに苦しそうだ。

「この人は、もうじき死ぬ」グンナルは直感した。「重力がこの人の息の根をとめるんだ……」そう思ったとたん、グンナルは力がぬけてよろけそうになり、部屋をでた。

グンナルはホールにすわって、みんなが出てくるのを待っていた。

「そこは作業場です」事務長が説明している。「わたしたちの自慢の部屋です」

グンナルもそこへ行ってみた。

ガラスの戸をあけると、なかは明るい部屋だった。長い机の上は、工作道具でいっぱいだ。白いうわっぱりを着た若い女性が、流しでえのぐの水いれを洗っている。窓ぎわのいすには、おばあさんがすわっていた。ししゅうをひざの上において手を休めている。包帯をまいた片足を、リノリウムのゆかになげだして、ねむっているようだ。

「ここでは、めいめい好きなことをやってもらうことになっています。アンドレアセンさん、何か

趣味をお持ちですか」
「ハトです」グンナルがかわりに答えた。
「はあ？」
「マーチンはハトを飼っているんです。だから、ぼくたちもここへ見にきたんです。ハトが飼えるところかどうかを」
「というと、ハトを持ってこようというんですか？　ここへ？」事務長は、にやっとわらった。
「ハトたちも、住むところが必要なんです」グンナルは、むきになった。「ベランダで飼えますよね、だれも使ってないみたいだし。あそこにハト小屋を置いてよければ、ぼくたちがてつだいます。ね、そうだよね、パパ……」
事務長は、さもおかしそうにグンナルをさえぎった。
「二年ほど前のことですが、ハチを飼っている人が来たんですよ。ハチの巣箱を持ってきたいといいましてね。ハチの巣箱を六箱も、ここにですよ！　うまいぐあいにそのときは、ご老人たちをさわがせずにすみましたがね」事務長は思いだしわらいをした。
だが、あとの四人は、まじめな顔をして事務長を見つめていた。
「あいにくですが、アンドレアセンさん。どこか、ハトをあずかってくれるところをおさがしにな

るんですな。ここはだめです。アレルギーをおこす人もたくさんいますし……」
「じゃ、マーチンもここへ来ちゃだめだ」グンナルはこういって、マーチンの手をとった。

家へ帰ってからも、トーレはきげんが悪かった。
「グンナル、おまえはどうかしてるぞ。老人ホームでハトを飼ってもいいかなんてきくんだから。ついでにわたしらも、お前とおなじ考えだと思われたじゃないか。まったくばかな話さ」
「じゃ、あのとき、どうしていっしょにいたのさ」
「あたしたちは、まさか……」リーナは口ごもった。
「じゃ、パパとママには、もっといい考えがあるっていうんだね?」グンナルの声は涙でつまった。
「アパートはとりこわされる。でもハトは帰ってくる。それなのに家も小屋もない。何もかもなくなっている。どうするの? どうすればいいの? わかってるなら、教えてよ!」
トーレはことばをさがしたが、けっきょく、だまりこんでしまった。
「グンナル、あなたがいきなり、とんでもないことを持ちこむんですもの」リーナが、あきらめたようにつぶやいた。

5

それからあとの数日間、グンナルは、本当に毎日、学校へ行こうと心に決めた。

少し早めに家を出て、ひたすら学校をめざして歩き、校門に着く。先生か友だちが、そこでグンナルに声をかけてくれさえすれば、学校へはいっていかれる。

だが、先生も生徒も、グンナルにはまったく関心をしめさなかった。

グンナルは、なかなか校門をはいるきっかけがつかめないでいた。そんなとき、やぶから小鳥がすがたを見せたりしようものなら、鳥のいるほうにいかないではいられなくなってしまう。どこかの家の窓敷居に、ハトが二羽とまっているのが見えたりすると、もう気になって気になって、ひとりでに、ハトのほうへからだがむいてしまう。そのうちに始業のベルは、とっくに鳴り終わってしまうのだ。

グンナルは、学校のかわりに自分の部屋で、いっしょうけんめい勉強しようとした。何時間も教科書をひらいてすわり、文章や絵をじっと見たりした。だが、目は活字の上をすべっていくだけで、

何も頭にはいらない。

そのうちに、ぼくに関係のないことばかり書いてあるんだから、わかるはずないや……と、勉強をあきらめて、窓からマーチンをさがすことになってしまう。

そんなある日の夕方、玄関のベルが鳴った。グンナルはびくっとした。最悪の事態になるかもしれない。

担任の先生か？　校長先生かもしれない……ひょっとして、警察かもしれない。きっとぼくをつれに来たんだ！

グンナルはとっさにベッドにもぐりこんで、頭をまくらでかくした。

まもなく、だれかが部屋にはいってきた。

グンナルは、からだをかたくした。動くまいと思えば思うほど、からだがふるえてくる。と、そのとき、まくらが手あらくどけられた。パパの手が、グンナルの腕をむんずとつかんだ。

「さあ、いったいどういうことなんだ？　聞かせてもらおう。居間へ来なさい！」

グンナルはパパにひきずられていった。腕をしっかりつかまれているので、にげようもない。

「いたいよ！」

しかしトーレは力をゆるめず、そのまま居間までひっぱっていき、じゅうたんの上に、グンナル

をおさえつけた。
ソファーには女の先生がすわっていた。顔は赤く、涙でぬれたハンカチをにぎりしめている。
トーレは手をはなし、ぼんやりと立ちつくして、つぶやいた。
「おれはどうしたらいいんだ。息子に、まんまとだまされつづけていたとは……」
「トーレ、おねがいだから、何もかも、これ以上悪くしないでちょうだい」リーナがいった。「グンナルだって、うそをつきたくてついてたわけじゃないのよ。グンナルをなんとか助けてやらなきゃならないのは、あたしたちなのよ！」
「ぼく、トイレへ行きたい」
「だめだ！　ここにいろ。ここだ、どこにもいくな！」トーレは、ふるえる手でゆかを指さした。
「だって、だって、ぼく……」
女の先生は、もう一度涙をぬぐって、いった。
「トイレへ行かせてやってください。グンナル、あたしたちは、あなたをせめるわけじゃないのよ」
グンナルはパパを見た。パパはひたいに青すじを立てて、女の先生をにらんでいる。
廊下に出るとグンナルは、トイレのドアを一度しめ、またあけて、そっと居間の入り口にもどった。

「あの老人のせいなんだ」パパの声が聞こえる。「あの老人を警察に通報しよう。こんなふうに子どもをつれだすなんて！　まったく、あのおいぼれの毛をむしってやりたいよ！」

グンナルは、いたたまれなかった。足音をたてずに玄関へ行き、八階から一階まで、それこそ飛ぶように、おりていった。

グンナルは、マーチンのアパートの前で足をとめた。とつぜん寒い風がふき、低くたれこめた雲から、雨が落ちてきた。

グンナルの話を聞いたら、マーチンは、ものすごくおこるだろう。

それでもグンナルは、マーチンに会いたかった。

男がひとり、アパートの建物から出てきた。ハトのかごを持っている。グンナルは、思わずかごのなかをのぞきこんだ。なかで、ハトがクークー鳴いている。

グンナルは、はっと気がついた。つぎの瞬間、夢中でアパートの階段をかけあがっていた。

階段の上で、ふたりの男とすれちがった。ハトを買ってきたのだろう。ふたりは満足そうに、かごのなかをのぞきこみ、屋根裏部屋の老人のことを話しあって、ふふっとわらった。

屋根裏部屋の前まできて、グンナルはふたたび足をとめた。なかで話し声がする。グンナルはゆっ

くりなかにはいり、暖炉のそばまで来た。

マーチンが、見知らぬ男の前にかごを置いてハトをうつしている。

「それから、その二羽も」その男は、天井の梁にとまっている、ブローマンとグルドッカを見あげていった。

「あの二羽は売らん」マーチンがはっきりことわった。

「五〇〇クローネで、どうです？」

「売らんといったのがわからんのか！」

「じゃ、七〇〇では？」

しばらく、沈黙がつづいた。それから、しわがれ声が聞こえた。

「売るわけにはいかん」

「しかし、どうしてです？　もうやめるんでしょ？　もうあなたは、ハトを飼っていられないんですよ。あの二羽は、あと一、二回は子どもがとれますよ。それとも、あとをつぐ人でもいるっていうんですか？」

「とにかく、売らんといったら、売らんのだ！」マーチンは、男にくってかかった。

男はのけぞるようにしてよけ、何枚かお札を出して、部屋を出ていこうとした。が、玄関でもう

一度立ちどまった。

「残念(ざんねん)です、アンドレアセンさん。二羽(にわ)ともいい鳥なのに。ま、お気持ちはわかりますがね」

その男が立ち去(さ)ったあと、屋根裏部屋(やねうらべや)はしばらく、何の音もしなかった。ときおり、木材(もくざい)のきしむ音と、二羽のハトのたてる小さな音がするだけだった。

とつぜんマーチンは、力がぬけてしまったように、いすにしずみこんだ。顔と頭をくしゃくしゃとなでまわし、何やらぶつぶつとつぶやいた。

そのとき、ブローマンが天井(てんじょう)から舞(ま)いおりて、マーチンの肩(かた)にとまった。そして、マーチンの耳とのどを、やさしくつっついた。マーチンは、からだをゆすって、ブローマンを肩からどけて、手の上にのせた。そして、背中(せなか)を何度も何度もなでながら、「ブローマンや、いよいよ、どうしようもなくなっちまったね」と、つぶやいた。

グンナルは、そっと階段(かいだん)をおりた。

アパートの外へ出ると、グンナルは足をとめた。氷のように冷(つめ)たい風を受けながら、グンナルはじっと立っていた。

とつぜんマーチンが、オートバイを出してきた。ハトのかごとスコップと、くつのあき箱(ばこ)が荷台にのせてある。

グンナルは、それを見て頭に血がのぼった。とんでいって、マーチンを責め、さけび、なぐりたかった。だが、なぜか、からだを動かすことができなかった。

マーチンはエンジンをかけた。今日はヘルメットもかぶらず、手ぶくろもしていない。うすいシャツに雨があたって、肩のあたりがじっとりとぬれている。

マーチンのオートバイが通りへ出ようとしたとき、車が走ってきた。マーチンは一時停止した。そのときグンナルは、ころがるようにマーチンのオートバイにかけより、荷台のハトのかごに顔をおしつけた。

かごのなかには、ブローマンとグルドッカがいる。二羽ともおびえている。

グンナルは、ハトにむかってやさしく話しかけていた。

「おまえたちを死なせたりしないからね。ぜったいに死なせたりするもんか。ぼくが守る。ぼくが助けてやるよ。ぼくがおまえたちを大事にするよ。ほんとうだよ。だから安心して！」

そのときのグンナルには、ハトしか見えなかった。学校も雨も、つめたい風も、さっき腕をつかんだパパの手も、何もかもわすれていた。

マーチンはグンナルの腕をつかんで、オートバイにのせた。グンナルは、ハトのかごのわきにすわった。ふたりの乗ったオートバイは、郊外の畑地でとまった。風をともなった雨が、ふたりにた

たきつける。とても寒い。
「グンナル、おまえ、ここで何をするか、わかってるな！」
「殺しちゃいけない！　ハトを殺さないで！」
マーチンは、グンナルをオートバイからおろした。
「ほかに、方法がないんだ」
長いことふたりは、じっと見つめあっていた。やがてマーチンは、うつむいて、ハンカチをだし、時間をかけて鼻のまわりをこすった。
「殺すなんていけないよ」グンナルは、小さな声で、つぶやいた。
「わしには、ほかに方法がないんだ」マーチンはまだ、うつむいていた。「この二羽だけは、売るわけにはいかない。売ってくれというやつはいる。だが、売るわけにはいかない。年をとりすぎてる。べつの場所では、生きていかれないんだ」
「マーチンがいっしょなら、どこへ行っても平気でしょ？」
「……」
「ね、そうでしょ？　マーチンといっしょなら、だいじょうぶだよね？」
「グンナル、よくお聞き。わしは年よりだ。もうだめなんだ。ずいぶんいろいろ、いいあらそった

が、もうそれもいやになった。さあ、どいてくれ！　あっちへ行ってくれ！」
マーチンは、ハトのかごからグンナルの手をひきはなそうとした。
「そんなことしちゃいけないったら！」グンナルはかごにしがみついて、おおいかぶさるようにした。「いけないことなんだよ。そうでしょ！」
マーチンは、ふたたび、グンナルをはなそうとした。が、こんどは、あまり力をいれなかった。
マーチンは、とうとうあきらめて、オートバイの座席にしずみこんだ。
長いあいだ、ふたりとも何もいわなかった。とつぜんグンナルは、からだがびしょぬれになっていることに気がついた。それと同時に、ものすごい寒さを感じ、からだががたがたふるえだした。
マーチンはそれを見て、グンナルのひたいや首すじをなでた。
「そうか。おまえはそういうやつだったのか。仲間だな」
マーチンの手は意外にも、あたたかくて、すべすべしていた。そのとたん、グンナルの目から涙が滝のように流れだした。
マーチンは、グンナルのからだに両腕をまわして、背中をなでてなぐさめた。
「そうだったのか。おまえがそんな気持ちだとは、ちっとも知らなかった。悪かったな」
「殺しちゃだめだ」グンナルは、すすりあげながらいった。

ようやくマーチンは立ちあがり、いつものように空を見あげたが、元気がなかった。

「よし、家へ帰ろう。考えなおそう。そうしよう、な？」

ふたりがもどってみると、アパートの通りは閉鎖されていた。通行どめのさくがならんでいて、そのおくに、大きなトラックとパワーショベルがはいっている。

マーチンは、急ブレーキをかけてオートバイからおり、さくをどけはじめた。

オレンジ色のつなぎの作業服を着た男が、近づいてきて、いった。

「だめだめ、立ち入り禁止。どいて、どいて」

マーチンは耳をかそうとしない。

「立ち入り禁止なんですよ」作業服の男は、マーチンの手をさくからはずそうとした。「警察をよびますよ」

「警察をよぶのは、こっちのほうだ。ここはわしのうちなんだからな」マーチンは、男をじっとにらんだ。

男は、一歩あとずさりした。

「今はちがいますよ。このあばらやは、今夜こわすんですからね」

そこには、現場監督もいた。作業服の下に白いシャツを着て、ネクタイをしめている。

「アンドレアセンさんですか、おそかったですね。でも、来てくださってよかった。あなたのものは、いま、外へ出しているところですから。協力してくださるつもりなら、ちょっとどいていてください」

マーチンはこぶしをにぎりしめて、何かいおうとした。あごががくがくと動いて、口のまわりに出たあわをかんだ。声を出そうとしているようだった。とつぜん、マーチンの顔が奇妙にゆがみ、足がよろめいた。マーチンは足をふんばり片手を胸にあてたまま、立ちつくしていた。

グンナルは、マーチンにかけよった。

「マーチン、どうしたの、だいじょうぶ?」

そのうち、立っているのがつらくなったのだろう。マーチンはかがんで、ズボンのポケットに手を入れ、プラスチックのケースをとりだした。そして、すばやく、錠剤を口のなかにほうりこんだ。

男たちは顔を見あわせると、とりあえず、マーチンを両わきからだきかかえて、近くの階段にすわらせた。

「ここにじっとしていてください。アンドレアセンさん、お気のどくですが、われわれの工事も、かなりおくれておりますので」と監督はいって、すぐに男たちに指図した。「さあ、みんな、仕事を

つづけてくれ！」

しばらくして、マーチンはグンナルを見あげた。

「わしも、もうおしまいだな、坊主。どうすることもできないよ」

グンナルは答えずに、男たちがいすやテーブルを、通りのむこう側にはこんでいくのを、ながめていた。

「あれ、マーチンのでしょ。持っていかれてもいいの？」

「かってにするがいいさ。わしはもうおしまいさ」マーチンは肩をすくめた。

「優勝カップも？」

「何もかも、消えちまえばいいのさ！」

グンナルはマーチンに近よって、耳もとでささやいた。

「ぼくに、いい考えがあるんだ。だまって、ぼくのいうとおりにしてね」

一時間後、マーチンとグンナルは、ふたたび三輪オートバイにのっていた。

マーチンは服装をととのえ、ヘルメットをかぶり、ゴーグルをかけ、手ぶくろをはめていた。グンナルは荷台で毛布にくるまって、ハトのかごとえさ箱とのあいだにうずくまった。グンナルの足

もとのダンボール箱には、銀製品と優勝カップがつめこまれている。
「あとのものは？」作業服の男がきいた。
「救世軍へ寄付してくれ！」マーチンがさけび返した。
マーチンがエンジンをかけると、音がかべにこだました。ふたりの後ろでは、パワーショベルが動きだし、両方が、きそいあうように音をたてた。
グンナルは荷物のかげにかくれながら、道のむこうをのぞき見た。
パパだ！　むこう側の人だかりのまんなかをかきわけて、こっちへ来る。
「早く、発車してよ！」グンナルはささやいた。
けれどマーチンは、トーレを待っていた。トーレのレインコートから、雨がしたたり落ちている。ぬれたかみの毛が、目のあたりにへばりついている。
「グンナルを見ませんでしたか！」
マーチンは答えなかった。
「グンナルがどこにいるか知りたいんですよ。家出してしまったんです！」
「どうしてまた、そんなばかなことをしたんでしょうね」
「あんたの、いまいましいハトのせいですよ」

マーチンは、トーレの顔をじっと見つめた。
トーレは気をとりなおして、さけんだ。
「わたしが今まで、子どものいうことに耳をかさなかったのがいけないんです。息子（むすこ）を見かけませんでしたか？　教えてください！」
「早く、走ってよ！」グンナルはさけんだ。どうしてさけんでしまったのか、自分でもわからなかった。その声と同時にマーチンは、エンジンをふかし、オートバイは、アパートの前をとびだした。
トーレはオートバイを追ったが、距離（きょり）はだんだんはなれていった。
グンナルはからだを起こし、両手をラッパのような形にして口にあて、さけんだ。
「もう、こんなとこにいるもんか。ブローテンへ帰るよ！」
トーレはいっしゅん立ちどまって、あえぐように口を大きくあけた。それから、また追いはじめた。腕（うで）を大きくふり、レインコートのすそをひるがえして……。
マーチンはいきおいよく、かどをまがった。もうだれも追ってこない。

ハイウェイを走ったあと、ふつうの道にはいった。ハイウェイは車がいっぱいで、マーチンのオートバイは、どなられたり、ののしられたりした。だが、いなか道はすいている。前にも後ろにもほ

かの車は見えない。あたりは暗くなってきた。

そのうち、雨があがり、空は晴れた。北の山のはしに、かすかに明るさがのこっている。

グンナルは毛布のなかに、すっぽりともぐりこんでいた。たえまのないエンジンの音と荷台のゆれとが心地よいひびきとなり、グンナルをねむりにさそった。グンナルのまぶたが、だんだん重くなった。

グンナルがまどろみからさめ、顔をあげてみると、ゆくての暗い田園に道が一本、光のすじのようにのびていた。道は空にむかって、ぐんぐんのぼっていた。坂をのぼりきって、たいらな道に出ると、エンジン音は軽くなり、タイヤの音も小さくなった。

冷たい風が、気持ちいい。山の風だ。やっと山に帰ってこられたんだ。マーチンも、ハトも、優勝カップもいっしょに！　ああ、よかった！

グンナルは、ほっとして、またねむくなった。

グンナルは、寒さにふるえて目がさめた。あたりはまっ暗で、何も見えない。今、いったいどこにいるのかもわからなかった。

そうか、ここはブローテンなんだ！

グンナルは、マーチンといっしょにゆうべおそくブローテンに着き、家にとびこんだのを思いだした。そして今、グンナルがねているのは、なつかしいベッドのなかだ。

グンナルは起きあがって耳をすまし、両親がつかっていた寝室のドアを見つめた。ドアは少しひらいていたが、パパのいびきも、ママの寝息も聞こえてこない。

そうか、パパもママも、ここにはいないんだ。ぼくは、パパたちからにげて、ここへ来たんだから。今ごろ、ママは泣いているかもしれない。警察にとどけただろうか。ひょっとしたら……。

グンナルはそれ以上、考えたくなかった。

グンナルは、部屋着を着てゆかにおりた。ゆかは、氷のように冷たかった。それでもかまわず、窓ぎわまで歩いていき、窓をあけ外をながめ、耳をすました。

森はしいんと静まりかえっている。山で鳴くフクロウの声も、キツネの声もしない。かれ葉の下のネズミも、まだまどろんでいるのだろう。

森の動物たちは、ぼくがブローテンにもどってきたことを知らないんだ。

ぼく、もどってきたよ！　グンナルは、声に出してさけびたかった。

グンナルが、小部屋のドアをかすかにあけると、異様な音が聞こえた。マーチンのいびきだ。マーチンはドアに背をむけて、ひゅうひゅうと息をし、ときどき、むにゃむにゃとつぶやいている。そ

うかと思うと、しばらく何の音も聞こえなくなる。息がとまってしまったのではないかと不安になる。するととつぜん、大きな呼吸がはじまる。

グンナルは、ますます寒くなってきた。歯の根が合わない。マーチンのふとんのなかは、あたたかそうだ。グンナルは、そっとマーチンに近づいて、思いきってマーチンのふとんのはじを、少しめくってみた。よその人の汗のにおいと、大きな寝息が、いっせいにグンナルにおそいかかった。それでもグンナルは、マーチンのふとんにゆっくりとからだをすべりこませた。

マーチンが思いだしたように、何かつぶやいた。グンナルはどきっとして、からだをかたくする。

だが、つぶやきが終わると、グンナルはさらにおくへもぐりこんだ。

ようやく、あたたかいぬくもりに行きついた。グンナルは、老人の網目のシャツの背中に、肩をおしあて、毛深い老人のすねのそばに、つまさきをのばした。

だんだんとふるえがおさまって、からだが、ぬくぬくとあたたまってきた。グンナルは頭をまくらの上にそっとのせた。

高くのぼった太陽に顔をてらされて、グンナルは目をさました。マーチンを起こそうとしたとき、家のなかで音がした。

だれかが台所を歩いている。ゆかのきしむ音が聞こえる。だれかが家を、出たりはいったりしているんだ！

「マーチン、起きてよ！　だれかいるよ！」

ドアが細くひらいた。

強盗かもしれない。

グンナルは、マーチンのわきにもぐりこんだ。

ママだった。ママが、大きなおぼんに朝食をのせて、はこんできたのだ。

リーナはグンナルとマーチンを、かわるがわる見た。

「あなたがた、おなかすいているだろうと思って」ママは、おぼんをベッドの上に置いて、すすめた。「あたしは今朝来たのよ」

マーチンは、ようやくリーナと視線を合わせることができた。

「かってなことをして、まことに申しわけない。あの……シーツだけは、わたしのを使いました。あとかたづけは、しておきます。それから……」マーチンは口ごもった。「こんなことになってしまって……」

「いいんですよ」リーナはふたりの前へ、いすをもってきた。「あとでお話ししましょうね。とにかく

今は、めしあがってくださいな。お茶がさめないうちにね」
グンナルとマーチンは朝ごはんを食べはじめたが、グンナルは、あまり食欲がなかった。
しばらくしてグンナルは、重い口をひらいた。
「パパはどこ?」
「もちろん、町よ。お仕事があるのよ。パパには電話で、あなたがたがここにいることを伝えておいたわ」
「パパ、何ていってた?」
ママはいっしゅん、返事をためらった。
「あまり話さなかったけど、とてもがっかりしていらっしゃるわ。だってあたしたち、パパが思っていたほど、おたがいにわかりあっていたわけではなかったんですものね」
グンナルはうなずいた。
「パパ、おこってる?」
ママに笑顔がうかんだ。手をのばして、グンナルの頭をなでた。
「そうね……でも、起きてしまったことは、しかたがないわね」
「おこられる者がいるとすれば、このわしですよ」マーチンが口をはさんだ。

「少なくともあたしはもう、何とも思っていませんよ。さあ、やきたての丸パンをどうぞ」
マーチンは丸パンに手をのばした。そして、丸パンを鼻の下へ持っていってにおいをかぎ、グンナルに片目をつぶってみせた。
「なるほど、これはおいしそうだ」

グンナルとマーチンは、朝食のあとすぐに、ハト小屋づくりにとりかかった。場所を見つけるのは簡単だった。納屋のおくにつくることにした。梁のはしには風あながあいていて明るいし、ハトが外に出られるし、最適だった。
グンナルとマーチンはうす暗い納屋で、木箱のいすに、ぴったりくっついてすわった。マーチンは金づちをふるい、頭をはなしてながめては、考える。ときどき、ひたいの汗をぬぐう。グンナルは十センチの釘のたばをにぎって、ひかえている。一日じゅう働きとおしたら、いいかげん、からだが重くなった。
グンナルは、せきばらいして、声をかけた。
「マーチン？」
マーチンは夢からさめたように、ほっと息をついて目をしばたたいた。

「まだ、なかなか？」

「ああ、『ローマは一日にしてならず』さ。ハト小屋のなかは、もっと複雑だからな」

そのとき、ブローマンが、かごのなかでばたばたはばたいた。

「よしよし、さわぐんじゃないよ！」マーチンがいった。

ふたりの手で、ハト小屋の木わくができあがった。風あなから流れこんだ太陽の光が、ほこりをうかべながら老人の頭をてらした。

「後光がさしてるみたいだ」グンナルが、わらった。

「そうかい。そういえば、ソフィーもよくいってたっけ、『マーチンは、いつも後光がさしているのね』ってな」老人は、また考えこんだ。

グンナルはそれ以上、何もいわなかった。マーチンとなら、じっとすわっているだけでも、じゅうぶん満ちたりた気分になれる。

こんどはマーチンがおさえて、グンナルが釘を打つ番になった。仕事は着実に進んだ。

いよいよハト小屋の内部の作業になった。空気がよくとおるように、金網をはる。

「あしたは、いよいよ巣箱づくりだね」

そこへ、リーナがあらわれた。とても静かにはいってきたので、グンナルもマーチンも気がつか

なかった。リーナは、光を背にして立っていた。
「悪いんだけど、」リーナがいった。「あしたはほかの用があるわ、グンナル。学校へ行くことになってるのよ」
「いやだよ。ぼくたち、ちょうど調子がついて、うまくいってるとこなんだから。ハトたちをいつまでも、かごのなかにとじこめておくわけには、いかないんだよ」
「いいえ、グンナル。かってなことばかりはできないのよ。パパがここへいらしたら、何ておっしゃるかわかる？　あなたがいつまでもさぼっていたら……」
「ぼく、行かないよ」グンナルは意地をはった。「とにかく、これをやり終えなきゃ」
リーナは、うったえるようにマーチンを見た。
「マーチン、助けてくださいな。グンナルは、もう、あたしのいうことなんて、聞いてくれないんですよ。おねがいしますわ」
「グンナル、いいかげんに降参しなきゃいけないよ」マーチンがいたずらっぽくいった。「早いほどいいぞ」
「マーチン、いったい、どっちの味方なんだよ！」グンナルは興奮して立ちあがった。
「そりゃあ、グンナルの味方さ」マーチンは静かにこういって、グンナルを木箱のいすにすわらせた。

6

翌朝早くグンナルが戸をあけると、マーチンはもう、外の階段の上にすわっていた。マーチンは、じっと景色をながめている。かみの毛はさか立ったままで、からだも目も、まだねむそうだ。

「ねむれなかったよ」マーチンがいった。「ここは、静かすぎる」

「ぼくは、ちっとも静かじゃなかったよ。マーチンたら、まるで脱穀機みたいないびきをかくんだもの」

「町では朝方になると、働きに出かける人たちの音が聞こえてくるんだ。それを聞きながら、またねむったものだよ。音なんかものともせずにな。だが、ここは……」

「いまに、なれるよ」グンナルがいった。「今日は巣箱づくりをはじめるでしょ？　ぼく、できるだけ早く帰ってくるよ」

「人使いのあらいやつだ！」マーチンは、首の後ろに手をあてて、首すじをもんだ。「わしは年金生活者だぞ！　自由人だぞ！　だれの指図も受けないでいられるんだ」

グンナルは、ちらっとマーチンを見あげてにっこりわらった。
「ふうん。じゃ、ぼくのことも、指図しないでね」
そこへ、リーナが出てきた。のびをして、かみの毛をかきあげながら、ガウンの前をしっかり合わせた。

秋の森の、おちついた景色。一声、また一声とかすかに小鳥の声が聞こえる。野原を低く飛ぶ、二羽のカモの羽音がひびく。そしてふたたび、完全な静けさ。

やがて太陽が山のはしにすっかりすがたをあらわし、少しあたたかくなってきた。
「ここにいると、本当の休日ですな」マーチンがいった。
「ええ、いつもそうだといいんですけど」
リーナはそういって、大きく息をして立ちあがり、グンナルをつれて家のなかへもどった。

校長先生は、校長室でコーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。何もかも、前とおなじだ。学校のにおいもおなじだし、校長先生もかわっていなかった。校長先生は、顔いっぱいにほほえんでふたりをむかえた。それから、質問のあらしとなった。町のこと、町の生活が楽しめないわけ、町の学校がどんなふうにグンナルをおびえさせたか……。

そのあげく、校長先生は、グンナルはここが好きなんですね、といった。

グンナルは、校長室では一言も話さなかった。話しはじめるときがきたら、何もかもつづけて、一気に話そうと、いきごんでいたのだが。

ところがリーナが、かわりにしゃべりはじめてしまった。

グンナルは、口をはさまなかった。リーナは、始終グンナルの頭をなでながら、ことばをえらんで話した。

「グンナルはいい子です。気がやさしすぎるんですわ。やさしすぎるのも、ときには問題になることがあるんですのね」

校長先生は、満足そうにグンナルを見て、うなずいた。

「教室へ行ってもいいですか?」グンナルが、はじめて口をひらいた。

廊下でグンナルは、頭に日があたるのを感じた。頭があたたかく、ふくらんでいくような気がして、ほおがあつくなった。人が見たら、きっとへんなかっこうになってるんじゃないかと不安になって、グンナルは、頭に手をあてた。

ママは冷たい手を、グンナルのひたいにおしあてて、やさしくグンナルを見つめた。

「だいじょうぶ。熱なんかないわよ。あなたは元気よ。ちょっと興奮したんでしょ。でも、もうだ

いじょうぶよ。どうしてあなたとあたしとでブローテンにもどってきたのかって、もしね、グンナル、きかれたら、こういいなさい。アパートがまだ見つからないので、ってね……」
「ぼく、本当のことをいうよ」グンナルはそういって、深いため息をついて、ぶるっとからだをふるわせた。
クラスのなかも、前とおなじだった。おなじ机、おなじ生徒、おなじ先生……。グンナルは、あいている席にそっとすわった。背すじをのばし、こぶしをにぎった。右も左も見なかった。
先生は、グンナルに気がついた。
「グンナルじゃないか！　よく帰ってきたね」
グンナルは、だまってうなずいた。
「ずっと、ここにいられるのか？」
グンナルは、もう一度うなずいた。
「どうだい、元気か？」
グンナルは首をのばして、ことばを口のなかでころがしてから、ようやく声に出した。
「ぼく、キクイタダキを見ました」
「……」

先生は、にっこりわらった。

「やっぱり鳥のことだね。そうか」

何人かがくすくすわらった。

「死んだんです」グンナルの声は、大きかった。

先生はまじめな顔にもどって、せきばらいをして、教科書をひらいた。

「十四ページ。黙読はじめ！」

グンナルは、ふりむいて、ママを見た。ママは、グンナルにむかってはげますようにうなずくと、そっと教室から出ていった。

グンナルは、本にかぶさるような姿勢で、教科書をくいいるように見つめ、何が書いてあるか理解しようと努力した。

トーレは金曜日の夕方、ことのほか早く、ブローテンに帰ってきた。四時の鐘が鳴る前に、駅から電話をかけてきた。リーナがむかえに行った。

グンナルとマーチンは、むかえには行かなかった。ふたりは、ハト小屋にとびらをつけるのでいそがしかったのだ。

トーレはうちに着くとすぐに、ふたりのいる納屋へやって来て、ハト小屋の手前で立ちどまった。とこやへ行ったばかりなのだろう。顔もかみもさっぱりさせ、買いたての皮のジャンパーを着ている。

グンナルは思わず、あとずさりした。以前は、パパをむかえにかけていって、パパの腕にぶらさがり、だきしめられたまま、ぐるっとまわしてもらったものだった。しかし、今日は、ただだまってうす暗がりのなかで、パパが来てくれるのをじっと待っていた。

「ふたりとも、ここにいたのか」

「はい、はい」マーチンは、そう答えてから、はっと気がついて立ちあがり、トーレに頭をさげた。

「なんとも申しわけない。こんなことになってしまって。グンナルに罪はないのです。グンナルのせいではありません。わしが、……わしがここへ来たがったのです」

トーレはマーチンを見て、にっこりわらい、視線をグンナルにうつした。

「本当にそうなんですよ」マーチンがいいそえた。

「何もかも聞いたよ」トーレは、グンナルにむかっていった。「うまくいっているようだね。安心おし。おまえが学校へ行って、まじめにやるなら、文句はいわないよ……」

マーチンもグンナルを見つめた。

グンナルは泣きそうになった。大きなかたまりがのどにつかえ、何度飲みこもうとしても、飲みこめない。

「ハトをね」やっと、グンナルの口からことばがもれた。「ぼく、ハトを……ハトを……」

しばらくして、パパはうなずいた。

「もういいよ、よくわかってるよ。どんなぐあいにいくか、見ているよ。これからは、うまくいくもいかないも、おまえしだいなんだからね」

パパは返事を待っていたのだろう。だが、グンナルは何も答えなかった。パパはむきをかえて、出ていこうとした。

「マーチンがハトを小屋にいれるから、見ててよ」グンナルが、パパによびかけた。

「そうかい。ま、あとで見せてもらおう」そういって、パパはそのまま出ていってしまった。

マーチンは首をかしげてグンナルを見ていたが、やがて、元気づけるようにいった。

「グンナル、おまえがやってごらん」

その瞬間（しゅんかん）、グンナルの頭のなかは、ハトのことだけになった。かごのそばにひざをついて、かごのふたをあけ、なかの二羽（にわ）にやさしく語りかけた。

「さあ、おいで、新しいおうちができたよ。ほら、見てごらん。きれいにできただろう。おいで、

マーチンもここにいるよ。ほら、ここだ。さあ、出ておいで」

グルドッカが最初に出た。部屋のなかをひとまわりとんでから、とまり木にとまると見せて、くるっとまわって、マーチンの頭にとまった。

「よしよし、グルドッカ。おまえの主人がわかったか！」

それから、ブローマンも出てきた。風あなから外へ出たいらしく、はり出し窓の網にぶつかり、にぶい音を立てて落ちた。

グンナルが助けてやろうとすると、マーチンがとめた。

「自分で立つよ」

まもなくブローマンは、興奮した飛び方でグルドッカを追いまわし、しまいにはグルドッカの場所をうばって、マーチンの頭にとまった。グルドッカは、マーチンの肩にうつった。

マーチンは、いかにもうれしそうな顔をした。

グンナルは、わらった。

「マーチン、頭にブローマン、肩にグルドッカがいちゃ、動けないね。さあ、そのあいだに、ぼくは食事してこようっと」

日曜日の午後になった。四人は、玄関の階段の上にすわってコーヒーを飲み、ワッフルを食べていた。トーレはまもなく、町のアパートへもどらなければならなかった。

グンナルはときおり、ちらっとパパを見た。

いつものパパとは、どこかちがう。いやにまじめな顔をしている。そういえば、ママも、何となくぎこちない。

「おやおや」トーレは、午後の太陽を見あげながらいった。「こうしちゃいられない。もう駅へ行く時間だ。だれかが、金をもうけなきゃならんのだからな。それはそうと……」

「わたしのことなら、ご心配なく」リーナがいった。

「マーチンも、自分の分はお金をはらうっていってるよ」グンナルが口をはさんだ。

トーレは、ひとりひとりの顔を見つめてからいった。

「それにはおよびませんよ、マーチン」

「いいえ、マーチンもはらうわ。あたりまえのことでしょ」

「そうですか」トーレは、肩をすくめた。「それはありがたいですな。二重生活は、高くつきますからね」

トーレは、立ちあがって車にむかった。リーナは、キーを持ってあとにつづいた。

「ぼくもいっしょに駅まで行っていい？」グンナルが後ろからさけんだ。

「今日はだめだ。このつぎにしておくれ。ママとちょっと話があるから」

やがてパパとママののった車は、出ていった。

グンナルは、いつまでも見おくっていた。涙がこみあげてきて、のどがつまりそうだった。グンナルはかけだして納屋にはいった。

納屋の暗がりで、グンナルは立ちどまった。戸口のすきまから、マーチンがまだ階段の上にすわっているのが見える。グンナルはハト小屋にはいって、小屋の戸をしめた。

7

十二月。森も野原も、霜のぼうしをかぶり、じっと息をひそめていた。
リーナはある日、洗濯物を外にほしてみたが、けっきょく、巨大な薄氷のようになったシーツを、とりこむはめになった。マーチンは、居間と納屋とを何度も往復した。暖炉にあたっていたいと思わないでもなかったが、じっとしてはいられなかった。
「ハトがこごえてしまうと思ってるの？」グンナルがきいた。
「いいや、あの子たちは、寒さにはたえられる。わしより、ずっとじょうぶだよ。わしのおそれているのは、風だよ。風がふきあれると、わしらのつくったものでは、少々心もとないのでな」
「今のところ、風はありませんわ」リーナがいった。
「風がふいてきたら、ハトのようすを見にいかせてくださいね」マーチンはリーナにいった。
リーナはコーヒーをいれ、ケーキをすすめた。
「マーチン、退屈なさってるのではないかしら。何しろここは、あまりにも人が少なすぎますから」

「なんのなんの。会いたい人がいるわけでもないわしに、人恋しいはずがありますかな」

「そうだわ。グンナルといっしょに学校へいらしたら？　ついでに、いろんなお店でものぞかれたらどうかしら？　少しは気が晴れますわよ」

マーチンは、そんな案にのる気はなかった。

「コーヒーを買ってきていただきたいわ」ママは、グンナルに目くばせしながらいった。

マーチンはゆっくり道へ出た。グンナルはマーチンのまわりでとびはね、霜でかたまったじゃり道の石ころをけっとばし、みぞにはった氷を、しきりにふんだ。

「さわがしいぞ、坊主！」

グンナルはマーチンを見あげた。

「ちょっとはおもしろがってくれるかと思ったのに。静かなのはきらいなんでしょ？　マーチンったら、何をしたって、よろこんでくれないんだから」

マーチンはたじろいだ。

「路地裏で育つとな、いつも身のまわりに町があるんだ……」マーチンは話しはじめて、ことばを切った。

ふたりは立ちどまり、だまって遠くをながめた。

「今ブローマンをはなしたら、町へ帰っていくかな」グンナルがつぶやいた。

「そうとも、確実だ。ブローマンは頑固な老人さ。ここになれるのは、無理だと思うよ」

「マーチンがここにいても？」

「わしより、グルドッカがどこにいるかによると思うな」マーチンは肩をすくめた。

「マーチンとソフィーみたいに？」

「そうさ。思いだすよ、わしが、ハトをなくしたと思いこんだときのことをな」マーチンは話しはじめた。「ドイツのハンブルクでハトをはなしたんだ。そのハトが三年後に帰ってきた。坊主、三年後だよ。よその国のいたずら者が、つかまえていたんだろうね。そのハトが、わしの手にもどってきたんだ。そのときのうれしかったことといったら……。こうして思いだしただけで、胸がおどるよ」

マーチンは、にこにことわらっていた。それから、ため息をついた。

「だが、それもむかしのこと。今はもう、このなかには何もなくなってしまった」マーチンは、片手を胸にあてた。「もう、おしまいさ」

首の長いパワーショベルが、家をこわしている光景がグンナルの目にうかんだ。砂ぼこりがもうもうと立ちのぼり、道にあふれる。飛んできたハトたちが、つぶれたかごや、ひしゃげた金網の上で、はばたいているようすが見えるようだ。

グンナルはマーチンの手をとった。
「もうそんなこと、考えないことにしようよ。駅まで行けば、きっと話し相手が見つかるよ。あそこなら、いつも人がいるから」
マーチンは、グンナルをちらっと見た。それから、町のほうを見ていたが、くるりとむきをかえて、ブローテンへむかってもどりはじめた。
グンナルは動かなかった。まもなくマーチンは、かどをまがり、帰っていった。グンナルはじっと目をとじた。静けさが、グンナルをとりまいた。森や、畑をわたる、かすかな風の音だけが聞こえていた。
グンナルは道からはずれて、落ち葉の上を歩いた。草むらをわけ、こけむした大きな岩のほうへと足をはこんだ。
グンナルは、森のなかに立っていた。まわりのすべてはこおりつき、息をひそめている。遠くの山すそのマツの木で、灰色の鳥が一羽、枝のあいだを出たりはいったりしている。シジュウカラだろう。ものうげなさえずりを聞いていると、どういうわけか悲しくなった。
グンナルのすぐわきに、大きな樺の木があった。グンナルはのぼりはじめた。上へ、上へとむかって。そして、てっぺんに近い細い枝の上に、そっと腰をおろした。

なんて、広いながめなんだろう。夏には、こずえの波打つ森も、今は、ガラスのようにすけて見える。

道を行くマーチンのすがたが見えた。マーチンは足をとめ、薬をふたつぶ口に入れて、しばらく立ちどまっていた。そして、また、のろのろと動きだした。

グンナルは見おろしているうちに、少し目がまわってきた。

もしここから足をすべらしたら、ただよっていくだろうか。はばたくように腕(うで)を動かしたら、高くのぼっていくだろうか。ぐんぐん高くのぼって、自由に、もっと自由になれるかもしれない。なやみも苦しみもわすれて、あたたかい風にのって、空気のように軽く、だれにも追いかけられずに、のびのびと飛(と)んでいかれるかもしれない。

静(しず)けさをやぶって、学校の鐘(かね)が鳴りひびいた。グンナルは鐘が鳴り終わると、深くため息をついて、するすると、すべるように下へおりた。

とうとう雪がふりはじめた。一日目の朝は、軽い粉雪(こなゆき)がちらちらと舞(ま)いおりた。二日目はしんしんとふり、三日目になると、風がくわわり吹雪(ふぶき)となった。えりまきとのどのあいだにも、細くあけた目のなかにも、かみの毛や耳のなかにも、雪がとびこんだ。



グンナルは学校から帰ってくると、雪だるまのようにまっ白いからだのまま、居間にとびこんだ。からだをゆすると雪が散って、暖炉の火がぱちぱちいった。それを見ていたマーチンが、いきなりどなった。

「ハト小屋へ行って見てこい！　早く行け、坊主！」

ブローマンもグルドッカも、冷たい風にあたって、元気がなかった。二羽ともからだをふくらませて、とまり木にうずくまっていた。冬の風が、節あなやかべのすきまから、うなりをあげてはいってくる。雪が、ゆかの上にしまもようをつくり、ふきだまりには小山をつくっていた。

グンナルはすぐにえさをやり、水をかえ、話しかけたり、なでてやったりした。今では、二羽ともすっかりなれて、グンナルの手にのるほどになっていたのだが、今日は、じっとしたまま動こうともしない。

グンナルは、マーチンのところへかけもどった。

「冷たい風には、たえられそうもないよ！」グンナルはさけんだ。「マーチン、自分で行って見てよ。二羽とも元気がないんだ」

マーチンはグンナルを見あげて、ため息をついた。

「やっぱりそうか。この暖炉のそばでいい気持ちになっているのはわしだけか。なんとかしてやら

なきゃいけないね」

三十分後、ふたりはハト小屋で、すきま風とたたかっていた。リーナが、ぼろ切れをいれたふくろをふたりにわたしてくれた。ふたりは、ぼろ切れをさいたり切ったりして、かべのすきまというすきまにつめていった。グンナルはねじまわしの先で、ぎゅうぎゅうおしこんだ。指はかじかみ、手のひらには水ぶくれができた。けれど、そんなことを気にしているひまはなかった。

マーチンも真剣(しんけん)だった。それぞれ、自分の受けもったかべのすきまを、ていねいにうめつづけた。ひととおり終わって、ほっと腰(こし)をのばした瞬間(しゅんかん)、マーチンはよろけて、かべによりかかった。そして、そのまましばらく動かなかった。

グンナルは心配になった。

「ぐあいが悪いの?」

「いやいや、ちょっとめまいがしただけだ。すぐなおる。心配することはない」

「もうやめようよ、ね、マーチン。全部できたんだもの」

マーチンはハト小屋を見わたした。

「なんとかできたな。まあ、いいだろう」

しかし、しばらくすると、またかべの前にすわった。「どうも、金網のところが気にいらんね。もうちょっと何とかしてやらなきゃ」

グンナルが納屋を出るとき、風はもう、すっかりやんでいた。ときおりちらちらと雪が舞いおりている。雪雲はほとんど消え、ことのほか明るい夕ぐれだった。西の空に、森だけが、くっきりと黒くいろどられていた。

マーチンは、納屋の入り口に立ちどまり、ポケットに手をいれて、何かをまさぐっていた。グンナルの耳に、プラスチックの箱のしまる音が聞こえた。それから何か小さなつぶが、ゆかをころがるような音がした。マーチンがひざをついた。

グンナルはすぐに走りよった。

「マーチン、どうしたの！」

「わしの薬が……」マーチンは大きな手で、よごれたゆかをまさぐっている。「薬をのまなければ……薬がない……」

グンナルはびっくりした。すぐにゆかをさがしまわって、ようやくほこりのなかに、小さな白い丸い錠剤を見つけた。そして、その薬を、ごみのついたまま老人の口におしこんだ。

マーチンは何かつぶやいてそれをのみこみ、それからつばをはいて、もう一度、こんどは完全にのみこんだ。

マーチンは、それから数日ねこんでいた。その地域の医者が往診して、新しい薬をたくさんすすめた。そのあと医者とリーナは台所で、低い声で話をしていた。

グンナルは何とかして、ふたりの話を聞きとろうとした。

まず医者が何かたずね、それに対して、リーナが何かいいはっているようだった。

「奥さん、あなたはあの老人の、親せきでも何でもないんでしょ？　どうして、そんなに責任を持ちたがるのですか？」

「あら、なぜわたしが看護してはいけませんの？」

医者はそれにには返事をしなかったが、しばらくしていった。

「あの老人のめんどうをみるのは、オスロ市です。あなたでも、われわれでもない。あの老人は、まだオスロの市民なんですからね。そうでしょ？」

「でも今は、ここでくらしていますわ」

グンナルはマーチンのそばにもどった。

「何ともないんだよ、坊主」マーチンは、片手をグンナルにあずけた。「血圧がちょっと高いだけなんだ。だからめまいがしたんだよ」

マーチンの手は鉛のように重かった。グンナルが手をはなすとマーチンの手は、かけぶとんの上にすとんと小さな音をたてて落ちた。

「死ぬときって、どんなふうになると思う？」

とつぜん、こんなことばがグンナルの口からすべりでた。

「何てことを聞くんだい」マーチンは当惑した。「そんなこと知るか！」

「ぼくにはわかる。落ちていくんだと思う」グンナルは、考えながらいった。「それはいいんだけど……その先……落ちる先はどこなのか、それが知りたいんだ。それからどうなるんだろうって。暗くて冷たいところへ行くのかな、お墓のなかみたいに……」

マーチンは長いこと考えていたが、ようやく頭をもちあげた。

「グンナル、それはちがうと思うよ。死というのはね、かぎりなく自由なんだよ。自由の世界へ飛んでいくんだ。わしらをしばるものが、何もなくなるんだから」

「でもぼく、天使なんか信じないよ」

マーチンはわらった。

「わしも信じないさ。だが、ソフィーがどこかでわしを待っていてくれることだけは、わかる。その方向へ飛んでいくんだ。のぼる太陽にむかって飛んでいくようにな。そういえばソフィーは、あたたかい朝の光がとっても好きだった。ソフィー……」
それから、ふたりのあいだに沈黙が流れた。かべの時計のチクタクいう音だけが、聞こえていた。
しばらくして、マーチンがいった。
「わしらの魂は鳥なんだ。わしはそう信じている。だから死ぬときは、かぎりなく自由な鳥になれるんだと思っているよ」

クリスマスイブを明日にひかえ、マーチンもどうやら起きることができた。マーチンはゆっくりベッドから出ると、服を着て、暖炉の前のいすに陣どった。
リーナはいそがしくなった。ほおを赤くして、台所で立ち働いている。台所からパンをやくにおいと、豚肉をやくにおいがしてきた。
「そろそろ町へ帰らないとな。あなたがたの、じゃまになるといけないから」マーチンがそうつぶやいたが、リーナはとりあおうとしない。
「ばかなこといわないでください。そんなことより、グンナルをてつだってやっていただけませ

ん？　銀器をみがきはじめるようですから」
グンナルは居間のテーブルに、真鍮のろうそく立てや、銀の器を置いてすわっていた。
グンナルは、よごれたこぶしでひたいの汗をぬぐった。
「ね、マーチンもてつだってよ。いいでしょ？」
「ああ、いいとも。わしは、ドーナツをあげるのだってうまいんだぞ」マーチンはそういいながら、さもやりたそうに台所の方をみた。
「そうよ、マーチンはもうなおったんだわ。元気になったのよ。でも、ここへ来てはだめよ。今日のところは、あたしにまかせてね」台所から、リーナのはずんだ声がした。

その晩、グンナルはなかなかねつけなかった。ママが、そばにすわっていてくれた。
「パパはきっとお帰りになるわ。心配しなくてだいじょうぶよ」
「でも、先週の日曜日だって、帰ってこなかったよ。その前の週末だって」
「今日は、ぜったい帰っていらっしゃるわ。クリスマスですもの。安心してらっしゃい。それよりあたしは、まだやることが、いっぱいのこっているのよ。本当は、ここにこうしてすわっているひまもないの」

グンナルはママの目をじっと見つめてから、鼻の先までふとんにもぐりこんで、ゆっくり目をとじた。

やがて、ママが立ち去る音がした。すぐに、グンナルは起きあがった。

そうだ、パパが帰るまで目をさましていよう。車が庭にはいってきたら、すぐ服を着て、パパを出むかえにかけていこう。

けれど、待ちに待ったパパの車の音が聞こえたとき、グンナルは横になったまま、起きようとしなかった。

パパは家にはいったらしい。ママと二言三言かわしている声が聞こえる。それから荷物をはこびこむ音がした。

グンナルはじっと待った。緊張のあまり、からだがふるえてきた。

ようやく、パパが階段をのぼってきた。そして、グンナルの部屋の戸をあけた。

グンナルは身じろぎもしないで待った。

パパがベッドまで来てくれますように！　そしてぼくをゆり起こして、「パパだよ。元気かい。さびしかったろう！」といってくれますように！

だがパパは、戸口にいっしゅん立ちどまっただけで、すぐ、戸をしめてしまった。階段をおりる、

重い足音がきこえた。

グンナルは目を大きくあけて、横たわったまま、暗やみを見つめていた。

クリスマスイブの日の朝、トーレとグンナルは、クリスマスツリーをさがしに裏山へでかけた。雪が深くつもっていて、ひざまですっぽりうもれてしまう。あたりは、モミの若木でいっぱいだった。グンナルが生まれた年に、トーレが植えた苗木が育ったのだ。今ではどれも、クリスマスツリーにするには大きすぎるほどになっていたが、日かげに一本、成長のおそい小さいのがあった。トーレは二回ほどおのをふるってそのモミの木を切りたおし、もちあげて見せた。

「これでいいかい？」

グンナルはうなずいた。

トーレは岩の上の雪を手ではらいのけて、腰かけた。ポケットからマジパン*を出して、グンナルにもすすめた。グンナルも、ならんで腰をおろした。

ふたりはしばらく、だまって景色を見ていた。

グンナルは、雪をひとつかみ手にのせて、重さをはかってみた。ほとんど重さを感じない。ふんわりした雪が、重さがないのに地面に落ちてくるのだ。

*砂糖とアーモンドの粉とをかためたお菓子

「どうしてだろう？」グンナルはひとりごとをいった。

「何のことだい？」トーレがきいた。トーレはたぶん、ほかのことを考えていたのだろう。

「どうして、人は死ななきゃならないんだろう？」グンナルがきいた。

トーレは戸惑った。いっしゅん、グンナルの肩に手をのせて、まじめに答えようとした。だが、すぐに考えなおして、手をはなした。

「そんなことを今考える必要はない。そんなことばっかり考えるのは、おまえのためにならないよ。

だから、わたしはおまえもいっしょに、町へつれて行きたかったんだ。おまえたちを……つまりな……」パパは、うまいことばが見つからずに、あきらめたように両手を広げた。

「グンナル、おまえは、いつもひとりでいるから、そんなことを考えてしまうんだ！」

グンナルは考えこんだ。パパの手のぬくもりが、まだ肩にのこっている。心の底で、パパがもう一度肩に手をのせてくれるようにとねがっていた。

「パパがここにいてくれればいいんだ」グンナルは、聞こえるか聞こえないかの声でいった。「みんな、みんないっしょに、ここにいられればいいんだ」

「わたしは働かなきゃならない。生きていくためにな」パパはグンナルを見ようとしなかった。そして、急に肩を落とし、つかれたような顔を見せた。

「ここから往復できないの？　ここから通ってる人もたくさんいるよ。ぼくのクラスの子のパパだって……」

「無理だね。こんなに遠いところから何年間も、かようことはできないよ」

「ねえ、パパは、仕事から帰って、毎日何してるの？」

トーレは考えていた。

「じつはね、大工仕事の作業台を買ったんだ。居間のまんなかにおいてある。いろんなものがつくれるよ。ほしいものがあったら、いってごらん。おまえの部屋のたなだろうと、もの入れの箱だろうと……」

「えさ箱がほしいな」グンナルがいった。「えさ箱をたくさんつくってよ。木のブロックのまんなかに、くぼみをつけたのだよ、くぼみのなかは、みがいてつるつるにするの。マーチンなら、くわしく説明できると思うけど」

「マーチンか！」パパはふきげんな顔をした。「あのじいさんのほうが、おまえにはたいせつなんだろうよ」

グンナルはパパを見つめた。パパのいうことが、よく理解できなかった。

「おまえにはマーチンとハトがいる！　じゃ、このおれは、いったい何なんだ？」

グンナルはまばたきして、つばをのみこんだ。
「パパがその気になれば、えさ箱なんか、すぐできるでしょ?」
パパはグンナルをちらっと見た。それから、むりに笑顔をつくろうとした。
「ああ、何でもつくってやるよ」パパは、グンナルの肩をなでて、くり返した。「ああ、つくってやるとも」

四人そろって、クリスマスイブのテーブルをかこんだ。料理は、豚のバラ肉と、ソーセージと、酢漬けキャベツと、コケモモだった。デザートは、クリームをかけたミックス・フルーツだ。
マーチンはいつになく、無口だった。そして、とつぜんスプーンを置いたかと思うと、ハンカチをとりだした。
リーナは心配して、料理が口に合わなかったのかとたずねた。
「とんでもない、リーナ。あなたのお料理は最高ですよ!」
「でも、あんまりめしあがらないわ」
「年よりは、たくさん食べられんのですよ」マーチンは、大きな音を立てて鼻をかんだ。
「泣いてるの?」グンナルがきいた。

「いや、そうじゃない」しばらくしてから、返事が返ってきた。
「何が悲しいの？　今夜にかぎって」
「うん、そうだよね、今日はクリスマスイブなんだよね。だから……」
　マーチンは、無理に何でもなかった顔をしようとしたが、声はいうことをきかなかった。
「ソフィーがクリスマスのたびに、まさにこのとおりの料理をつくってね、そう、これとまったくおなじ味だった。おなじソース、コケモモと砂糖……すべて、そっくりだった」
　こんどはリーナが、ナプキンでそっと目をふいた。

　食後、プレゼントをあけるときがきた。グンナルはパパから、ジャンパーとスキーのストックと、大判の鳥の本をもらった。ベルゲンにいるおばさんは、すばらしいナイフをおくってくれた。
　しかし何といっても、いちばんすばらしかったのは、マーチンからのプレゼントだ。ハトの競技に使う時計だった！　グンナルが、つややかな小箱をそうっとあけると、トーレものぞきこんだ。リーナがコーヒーをいれ、ケーキをかざっているあいだに、マーチンが時計のあつかい方を説明した。そして、ハトの競技の話をしてくれた。
　競技のはじまる前に、ハトの飼い主は全員クラブの部屋に集められ、時計を合わせる。それから、

それぞれずっと遠くへ行って、さだめられた時間にハトをはなす。そのあとは、ただじっと待つだけなのだ。時には、日曜日まる一日かかることもあるという。

「ソフィーがうんざりするのも、もっともなんだ。だが、ハトはかならずいつかもどってくるよ。もどってきたところでハトをつかまえて、足にまいてあるゴムの輪をはずして、時刻をしるしたスタンプをおすんだ。」

「おもしろそうですな。ところで、じっさいにもどる道を教えるのは、何なんでしょうね？」トーレが興味深そうにきいた。

「からだにあるコンパスでしょ？」グンナルが、わけ知り顔でいった。

マーチンは、ちらとトーレを見ていった。

「子どもたちですよ。競技に出るハトは、ひなを持つ必要がありましてね。子どもがいれば、帰りたくなりますよ。親の愛とはふしぎなものですね」

「大好きなものがいるってことがたいせつなんだね」グンナルがいった。

コーヒーを飲みながらトーレはまた、ハトの競技のことを話題にした。

「マーチンのハトは、優勝したことがあるんですか？」

「見せたかったよ」グンナルは両手をひろげた。「かべに優勝カップが、びっしりならんでたんだよ。

全部、純銀だよ。それから金メダルは、数えきれないくらい！」

「おいおい、大げさなこといわないでくれよ」

「箱は、パパも見たでしょ。おしいれにあるけど、全部マーチンの賞品だよ」

「なるほど、そうだったね」トーレがいった。

リーナはキャンディーをとりにいった。グンナルは、そっとパパの耳もとでささやいた。「パパ、何かわすれてるんじゃない？」

パパは、鼻にしわをよせて考えた。

「何のことだっけ？」

「マーチンへのプレゼント！」

パパはとびあがった。

「あっ、そうだった。マーチン、へんに思ってらしたでしょうね。わたしからのプレゼントがなくて」

「とんでもない。グンナルから、こんなすばらしい手ぶくろをもらって、この上何を望みましょう！」

「外を歩くときに、手がかじかまないようにと思ったんだ」グンナルがいった。

「おまけにリーナは、わたしにカーディガンを編んでくれたんですよ」

「背中がいたくなったりしないようにと思いましたの」リーナが、キャンディーを置きながらいった。

「また、年よりあつかいをしおって！」マーチンはおこるふりをしたが、うれしさをかくすことはできなかった。

「じつはわたしも、ちょっとつくってきたものがあるんです」トーレがいった。「車のなかに置いてありますが、気にいってもらえるかどうか……」

「それはそれは……。何でも大歓迎ですよ。年より用のゆりいすや、つえでなければね」マーチンは、トーレの背中にさけんだ。

トーレからのプレゼントは、とても長くて重いもので、トーレがゆかにおくと、ごつんと音がした。グンナルもてつだって、マーチンがつつみ紙をあけた。はばの広い松材にニスをぬった板が、何まいか見えてきた。表面は絹のようになめらかで、松やにのにおいがしていた。

「こりゃ、また、何と……」そういったきり、マーチンはことばを失った。

トーレは飲みかけのコーヒーがさめるのもかまわず、台所のひきだしからねじまわしを持ってきて、グンナルにてつだわせて、大きなたなを組み立てた。たなは、小部屋のドアのわきから暖炉の

わきまで、かべにきっちりとおさまった。
　さすがパパだ。一ミリのくるいもない。
「うまくできた。われながら感心するね。手なおしの必要なしだ」トーレは満足した。
「すばらしいたなだわ！」と、リーナ。
「うでがいいですな」マーチンが、感心した。
「ねえ……」グンナルはパパをひっぱった。「これ、マーチンへのおくりものだよね」
「そうだとも！」パパは勝ち誇ったように、グンナルからマーチンに目をうつした。「これはあなたのものですよ、マーチン。だれが何ていおうと！」
　そこではじめて、グンナルの顔がかがやいた。グンナルは部屋を出たかと思うと、すぐに、ダンボール箱を持ってきた。
「おいおい、かってなことをするなよ、長いことみがいてないんだから……」マーチンがとめようとした。
　グンナルは耳をかさずに、優勝カップをつぎつぎに、たなへならべはじめた。大きいのも小さいのもまぜこぜに、順序も年代もかまわずに、目立ったほこりだけさっとはらって、おしこむようにならべた。

とうとう、箱が全部からになった。グンナルは二、三歩あとずさりして、ながめた。
「寸法もちょうどよかった」トーレがいった。「ならべるものは、これでおしまいですか？」
「ええ、これでおしまいです。だがこれからは、グンナルがもらってくるかもしれませんよ。ま、少なくともわしはそう思っていますが。そうだね、グンナル。おまえがりっぱなハトの飼い主にならなくて、だれがなれるね！」

クリスマスの三日後に、トーレは町へもどっていった。リーナは車を使う用事があったので、トーレは今回は列車で行くことになった。グンナルも、駅まで見おくりに行った。
駅までの車のなかでは、三人ともあまり口をきかなかった。
でも最後にグンナルは、やっぱりこうきかずにはいられなかった。
「パパ、今度いつ帰ってくる？」
トーレが返事をするまでには、かなりの時間がかかった。
「そうだね、グンナル。おまえが学校でちゃんと勉強して、ママにやさしくしたらな！」
「まあ、何もかも、グンナルのせいにしないでくださいな」リーナはちょっとおこったようにいった。「グンナルに、そんないい方しないでくださいよ！」

「冗談だよ」と口ではいったが、トーレはわらわなかった。

列車はすでに、プラットホームにはいっていた。

パパはグンナルの頭をなで、ママにうなずいて、わかれをつげて、のりこんだ。

ずっと前のことを、グンナルは思いだした。

あのときはパパとママが、あんまり長いことしっかりだきあったままなので、ぼくはたまりかねて、ふたりのあいだに、ごりごりと背中からわりこんでいったっけ……。

パパは座席を見つけた。

グンナルはホームでぴょんぴょんはねて、腰かけたパパを見ようとした。

トーレは、ようやく気がついて立ちあがると、窓をあけた。グンナルは、パパの目を見ていった。

「ぼく、いい子になるよ、パパ！」

トーレはグンナルの視線を受け、じっとグンナルを見ていたが、やがて大きくうなずいた。

「ぼく勉強するよ。おさらもあらうし……何でもする！」

「よし」トーレは、目がしらのほこりをとるような手つきをした。「そうだ、がんばれよ、グンナル」

車掌がふえをふいた。列車が動きだした。

パパはもう一度グンナルを見てからすぐに頭をひっこめた。列車は行ってしまった。

8

毎日がたいした変化もなくすぎていった。一月は雪がつもって、音が消えた。ハト小屋でも、たいした変化はない。ハトたちはよくえさを食べ、すこぶる調子がいいようだった。

それにひきかえマーチンは、ほとんどハト小屋へ行かなくなった。

そのうちに、寒さはいちだんときびしくなった。

二月のある夜中、グンナルが目をさまして、窓の外の温度計を見ると、マイナス三十度をこえていた。

グンナルは、ジャンパーを着るのもわすれて庭をかけぬけていき、セーターの下に二羽のハトをかかえてもどり、自分のベッドのなかにいれてあたためてやった。そのあとグンナルは、かぜをひいてしまったが、ブローマンとグルドッカは、おかげで元気だった。

マーチンは、ハトを思うグンナルの勇敢な行動をほめて、大きなカップを一つグンナルにゆずった。

その週末、町から帰ってきたトーレは、土曜日一日かけて、ハト小屋を断熱材でくるみ、風が通らないようにしてくれた。

グンナルはマーチンをハト小屋へつれていった。

マーチンは、トーレの仕事に大いに満足した。

「これで、お望みどおりにできたんじゃないかな」トーレはそういいながら、最後の釘を打った。

その晩はひさしぶりに、本当になごやかで、楽しかった。トーレは、ソファでリーナに腕をまわしてすわり、テレビをつけずに、みんなでダイスゲームをして遊んだ。

とうとうマーチンはねむくなって、先に部屋を出た。

グンナルはまだ起きていて、ソファにすわっているパパとママを見ていた。ふたりがにっこりわらうと、グンナルもわらい、あくびをすると、グンナルもつられてあくびをした。ところがそのうち本当にねむくなってきて、ソファにすわったまま、うたたねをしてしまった。

グンナルは深いねむりのなかで、パパにだかれて、はてしなくつづく長い長い階段をのぼっていくような夢を見た。

学校は、ますますつまらなくなった。しめった毛糸のセーターのにおいと、暖房機から出るあたたかい風で、頭がくらくらしてくる。先生の話すことも、あいかわらずわからないことだらけだった。

ある日のこと、「手紙を書く」という宿題が出た。グンナルは夜おそくまでかかって、部屋にこもって書きつづけた。手紙は、大きな紙に三まいになった。パパへの手紙だった。ママのようすや、グンナル自身のことや、マーチンがもうすぐハトの訓練方法を教えてくれることになっているということを書いた。そして最後に、「すばらしいえさ箱をつくってくれて、ありがとう。グルドッカはあれが気にいってます。いつか一度、グルドッカを手にとってみてください。グルドッカは手紙をはこぶことができるんです。パパが毎週帰ってきてくれれば、グルドッカもパパになつくと思います」と書きたした。

グンナルは返事を待ったが、いくら待っても、パパからの手紙はとどかない。

「パパは筆ぶしょうなのよ」ママはそういってなぐさめてくれたが、グンナルは、気になってしかたがなかった。

そしてある晩、台所のいすにすわっているとき、グンナルは思わず口に出した。

「パパはぼくたちのこと、もう好きじゃないのかもしれないね」

ママは、パンをこねていた手をとめた。

「何いってるの！　ばかなこといわないでよ！」

「パパは、ここにいたくないみたいだね」

「いいえ。パパはここにいたいのよ。ただね、町にいつづけるほうが、毎週往復するより、めんどうくさくないと思っていらっしゃるだけよ」ママは、パン生地をのばす手に力をいれた。

「ママたち、わかれるの？」

リーナはしばらくだまっていた。リーナはパン生地の形をととのえ、オーブン用の鉄板にならべ、霧をふきかけた。

「どっちにしても、こういう生活をいつまでもつづけているわけにはいかないわね」

リーナがあきらめたようにいった。

「ぼく、ぜったいに、ママからはなれないよ」

リーナは背をむけた。むきなおったとき、涙のしずくがふたつ、パン生地の上に光って落ちた。

「そんなこといわないでよ。パンがしょっぱくなっちゃうじゃない」

リーナは笑顔をつくりながら、腕で鼻の下をこすった。

ようやく春になった。つもった雪は、日に日にとけていき、太陽の光があたたかくなり、階段わきでは、クロッカスが芽を出した。

グンナルは、フキタンポポとアネモネを両手にいっぱいつんで、学校から帰ってきた。長ぐつは

雪どけ水で、なかまでぐっしょりぬれてしまった。
グンナルは、アトリがもどってきたこと、コマドリがいつもの場所にいること、セキレイが、しっぽをぴこぴこ動かして庭にいたことなどをノートに書きとめた。
マーチンは、ちょっと外に出てみる気になり、毛布にくるまって、玄関の外にこしかけた。グンナルは、枝を切ってつえをつくってマーチンにわたした。マーチンはその上に両手をかさね、あごをのせて、町の方角を見つめて考えこんでいた。
やがて、マーチンは話しはじめた。町での春のにおいのこと、アパートの中庭にさしこむ春の日ざしのこと、ごみ箱のかげから顔を出す、スノードロップのこと……。
「アパートのすみの白樺をおぼえているかい？　小屋のわきにあったろう。今ごろは、新芽を出しているだろうな。あそこは日だまりでね、あのあたりで最高の場所なんだよ」
ふたたび、マーチンは考えこんだ。グンナルは、マーチンをしげしげと見つめた。マーチンは冬のあいだに、めっきりやせてしまった。ほおはこけ、あごはたれさがってしまった。
「わしは近々、町へ帰らなきゃならないよ」
「だめだよ、ここにいなくっちゃ」
マーチンは、しばらくグンナルを見つめていたが、ふと、立ちあがろうとした。だが、よろけて、

またしゃがみこんだ。

「町へ帰らなきゃならない。当然なんだよ。わしは年をとりすぎたし、からだも弱ってしまった。もうじきおまえのかあさんには手におえなくなるよ」

マーチンは、戸口にしっかりつかまり、グンナルにささえてもらって、やっと立ちあがった。「何もかも、なりゆきにまかせなくてはならんよ、グンナル」そういうと、よろよろと歩きはじめ、グンナルのささえる手をはなして、納屋へむかった。「いつなんどき、何が起こるかわからないからな」

なるほど、ハト小屋のようすが、いつもとちがっていた。ブローマンは、食事ものどを通らないありさまで、あわただしく歩きまわっている。ようすがへんだ。恋をしているのだ。とつぜん、羽毛を立ててふくれたかと思うと、こんどはつばさをゆかにこすりつけて、クークー鳴いている。

一方、グルドッカは、いっこうに気がつかないふりをしている。ブローマンのことを見ながらも、ブローマンをさけるようなそぶりをする。ゆかのごみに気をとられているようだが、何かを待っているようにも見える。

ブローマンはまた、からだをふくらませ、前よりもはげしくグルドッカにせまる。するとグルドッカは、ひょいとにげる。

グンナルは心配になってきた。

「ね、グルドッカがあんなふうだったら……」
「だいじょうぶだよ」
「だって、にげてばかりいるじゃない。だったら、ひなは生まれないよ」
「グルドッカはもったいぶっているのさ。これは、女性の特権ってやつだ。ブローマンは父親になるものが通らなければならない自然の道を通っているだけだよ」

なるほど、何かが起こったにちがいない。二、三日すると、ハト小屋はおちついてきた。ブローマンは、自分のとまり木でうつらうつらしている。グルドッカは、巣のなかをととのえるのに専念していた。グルドッカは、巣のなかにすわってみてはすぐ立ちあがり、ぐあいのいいようになおしていた。
「なかなかすわろうとしないよ」グンナルは気をもんだ。
「だいじょうぶ」マーチンは、わらいながらいった。「じっとがまんだ、坊主。ハトを育てるのにいちばん大事なのは、がまん強さだ。そのうちに、何かはじまるから」

そのとおりだった。つぎにふたりつれだって小屋へ行ったときには、グルドッカは巣のなかにじっとすわっていた。

マーチンは指をのばして、グルドッカをそっとどけた。白い卵が二つ見えた。
「ほんとだ」グンナルは目を見はった。「夢みたいだ」
「あと数日で、卵のなかにひなができはじめるよ」マーチンは、グルドッカをなでながらいった。
「この卵なら、ひなになる。わしにも、そのくらいのことはわかるよ」
その日からグンナルは、ハト小屋にいすを持ちこんだ。そこで勉強することにしたのだが、始終、ハトが卵をだくすがたに気をとられていた。グンナルが卵を見たがると、グルドッカはひょいとどいてくれた。だが、ブローマンがあたためているときは、どいてくれるどころか、グンナルは指をさんざんつつかれた。

グンナルはすわりこんで、いろいろと空想した。世界一のハトを育てられたら、どんなにいいだろう。ぼくのハトが国内で優勝して、それから、世界大会でも優勝したら、どんなにすばらしいだろう。新聞に顔写真がのって、「有名なハト飼育者グンナル・ブローテン・オルセン、ふたたび世界記録を更新」って出るだろう。そしたらクラスのみんなも、少しはぼくを見なおしてくれるだろう。パパだってそれを読めば、ぼくがまんざらばかじゃないってわかるだろう、それに……。

いつかは、すべてがうまくいく。いつかはまた、パパもぼくに笑顔をむけ、もう一度、だきあげてくれるだろう。パパなら、ぜったい、そうしてくれる。

9

何かを待っていると、時のたつのはずいぶんおそく感じるものだ。

グンナルは学校へ行っても、授業にさっぱり身がはいらなかった。教壇で先生がしゃべっているあいだ、グンナルは定規に日数をきざみつけるのに夢中だった。算数の問題も、少しも頭にはいらない。何とかわかりかけたような気がすることもあるのだが、また、すぐわからなくなる。グンナルは、いすにじっとすわっていることができず、からだのあちこちをかき、授業の終わりの鐘が鳴るのを、ひたすら待ち望んだ。

先生はリーナと相談して、グンナルを鳥研究グループにいれた。グループにわかれて二時間つづきの研究授業をおこなうのだ。

グループには、グンナルとおなじように鳥の好きな子もいたし、グンナルの話を聞きたがる子もいた。

そのなかにひとり、自分の集めた卵を持ってきた男の子がいた。その子は、三十種類もの鳥の卵

を持っていた。セキレイやシジュウカラからはじまって、カラスやカササギの卵まであった。

グンナルは、卵を持ってこられただけで、いやな気分になった。その子は、とくいげに、卵のなかみを、すい出す方法を話しはじめた。

グンナルは、いきなりその子のところへとんでいって、その子の顔をひっぱたいた。

グンナルが学校からもどって庭へかけこんでくるのと、ほとんど同時に、マーチンが納屋から出てきた。マーチンは、グンナルを見て、けんかをしてきたのかと思った。

グンナルはこびりついた鼻血を、服のそででふきながらつぶやいた。

「もう学校なんか行くもんか」

マーチンは、グンナルの手をつかんだ。

「おいで、見せたいものがある」

グルドッカは、マーチンとグンナルを見ても、すわったままだった。ふたりをじっと目で追ってから、目をとじた。それからは、マーチンの指のなすがままになった。

マーチンは、指先に神経を集中させて、グルドッカの卵を一つ、手にとった。小さくて、こわれそうで、それでいて形のととのった卵だった。マーチンは、節くれだった太い指で、卵をはさんだ。

「ごらん」マーチンは、卵を明かりにかざした。
グンナルはのぞきこんだ。
「ほら、グンナル。卵のなかをよく見てごらん」マーチンは、明かりとりに一歩近づいた。
グンナルは目をこらした。たしかに、卵のなかに、暗い点のようなかたまりがある。
「これが、いのちだ」
グンナルはじっと見つめた。からだのおくから、たとえようもないよろこびがこみあげてきた。
ふしぎとしかいいようのないことがおこったんだ……いのちがめばえたんだ……。
感動が、胸いっぱいにひろがった。
もうじき、グルドッカのひなが生まれるんだ。
「卵をもどしてやったら？　冷たくなっちゃうよ。そうしたら……」
そのときとつぜん、卵を持っているマーチンの指が、わなわなとふるえだした。
グンナルはぞっとした。
マーチンののどから、きみょうな音が出ると同時に、マーチンの腕がぴくっとふるえた。卵がマーチンの指をはなれて、いっしゅん、宙にういた。
グンナルは悲鳴をあげて、身をなげだした。

スローモーションのフィルムを見ているように、卵は下へ下へと落ちていく。

グンナルはとっさに両手をつきだし、指をひろげた。グンナルは、たったひとつのことに集中していた。

卵をつかめ！　卵をすくえ！　ぎゅっとにぎっちゃだめだ！

グンナルは、肩からゆかに落ちたが、いたさなんか感じなかった。

あたたかい、なめらかなものが手にふれた。グンナルのしなやかな指が、それを、そっとつつんだ。

グンナルはゆかにあおむけになって、卵を手のひらにしっかりとのせて、ほっと胸をなでおろした。それから、もしも、こうして受けとめていなかったら……と考えて、ぞっと身ぶるいした。

「マーチン、だめじゃないか」グンナルは首をまわして、マーチンの顔を見ようとした。

ところが、マーチンが見えない。グンナルはすぐさま起きあがった。

マーチンはゆかにたおれていた。からだをねじまげ、ゆかのほこりのなかに顔をふせたまま、動かない。

救急車が来たときには、マーチンの意識は回復していた。

マーチンはグンナルを見ると、手をさしのべた。グンナルは、マーチンのそばにかけよった。

「行かないで！　ここにいてよ！　ハトにはマーチンが必要なんだよ。ぼくたちだって……ぼくたちだって、マーチンがいてくれないとこまるよ、マーチン！」

「もうだめだよ」マーチンは力なくほほえんだ。

救急車は出ていった。リーナとグンナルは、庭にとりのこされた。

「マーチン、死ぬのかな」グンナルがつぶやいた。

リーナは、がっくりと肩を落とし、ドアをおしてなかにはいった。

「いいえ、元気になるわ。そうよ、町へ帰れば元気になるわ。恋しがっていたじゃないの」

「マーチンが恋しがっていたのは奥さんだよ。きっと、死んで、奥さんのところへ行くんだね」

「そんなこといわないでよ」リーナはグンナルの目をじっと見すえて、首をふった。

「グンナルったら……。何を考えてるやら……」

グンナルは、ほとんど聞いていなかった。手には、まだ、マーチンの手の重さがのこっている。

やがて、グンナルの胸につかえているかたまりが大きくなった。そして、からだじゅうの力がぬけ、立っていられなくなった。

翌朝になっても、グンナルの気分はなおらなかった。朝食のテーブルで、マーチンの席があいて

いるのを見ると、ほんのひと口の食べ物でも、口のなかで、大きく、大きくふくらんでしまうのだ。
リーナはそんなグンナルを、かまわず学校へ行かせた。
「行ってらっしゃい。今日はあなたの好きなパンケーキをつくりましょう。元気になるわよ」
けれども夕食のときもグンナルは、二口三口を、やっと飲みこむだけというしまつだった。
夕食後、グンナルはハト小屋へ行った。そして、パパとマーチンに手紙を書こうと思って、望遠鏡の置いてある窓ぎわにすわった。けれど、気分がおちつかず、けっきょく何も手につかなかった。
三日間は、こんなふうにすぎた。
グンナルは食事のたびにいわれるままにテーブルについて、もぐもぐと口を動かしては、何度も食べものを飲みこもうとしたけれど、食欲は日に日になくなっていった。
しまいにグンナルは、ぼんやりと歩きまわるようになった。
ある日、キリスト教の授業があった。先生は、全能の神の話をした。
「聖書のあちこちで、『一羽のスズメが地に落ちるのも、神の意志である』と、しるされています」
「なぜ?」そんなことばが、グンナルの口をついて出た。
先生はおどろいた。
「なぜって?」

「どうして神様はスズメを死なせるんですか。全能の神だったら、スズメを生かしておくこともできるはずでしょう?」
「とてもむずかしい質問ですね」先生はいった。「おそらく答えられる人はいないと思いますよ。しかし、われわれは、みんな死ぬのだということは知っていますね。つまり……永遠に生きることはできないのです」
「ええ、わかります。でも、でもなぜですか?」
先生はあたたかいまなざしで、グンナルを見つめた。わらうようなざわめきが、教室にひろがった。
「……さあ、宿題を出します」先生は、本をくばりはじめた。
先生はグンナルのそばへ来ると、かがみこんでにっこりわらった。
「でも、神様は、あらゆるものを、誕生させているでしょ」
グンナルは、そのことを考えてみた。頭が熱くなった。誕生……誕生……。
そうだ定規だ! グンナルは定規を出して、日ごとにきざんである傷の数を数えた。十八だ。そうだ、十八日目になっていたのだ!
「先生! うちへ帰らせてください。どうしても帰らなければならないんです。おねがいします」

納屋（なや）の前で、グンナルは足をとめ、呼吸（こきゅう）をととのえた。

おちつかなければ！　ハトたちをおどろかしたら、巣（す）にもどらなくなってしまう。

グンナルは、そっとハト小屋にはいった。

その日のハト小屋の雰囲気（ふんいき）は、いつもとちがっていた。ブローマンはおちつかず、えさ箱（ばこ）におりたかと思うと、また、とまり木にもどった。しきりにおじぎをしては、グルドッカを見ている。グルドッカのほうは、いつもよりしっかりと巣におさまっていて、なかなかどいてくれなかった。

だが、グンナルが根気よく待っていると、グルドッカは、しかたがないといったようすで、ようやくからだをもちあげて、おなかの下にかくしているものを、グンナルに見せた。

卵（たまご）は二つともかえって、二羽（にわ）のひなになっていた。

毛のはえていない小さなひなは、目をつぶったまま、大きな口をあけていた。

グンナルは見とれた。息をとめていたので、死にそうに苦しくなった。汗（あせ）が、鼻をつたってゆかに落ちた。

「グルドッカ、えらいぞ、いい子だ」グンナルはささやいた。「さあ、ひなのめんどうをみておやり。さもないと、かわいい子たちが死んじゃうよ。おまえのひなを、ぜったいに死なせたくないからね」

ひなたちは大きな口をあけて、頭をふりたてた。グルドッカは、まだえさをやっていないらしい。

えさ箱のえさが気にいらないのだろうか。

「おねがいだ、グルドッカ。ひなたちに食べさせてやってくれ！」グンナルはいのるような気持ちで、グルドッカをひなに近づけた。

ようやくグルドッカは、半分消化したえさをのどのおくから出して、大口をあけているひなたち一羽一羽にあたえた。

ひなたちは、順調に育ち、ぐんぐん大きくなった。

ブローマンは外へ出たいのか、ときおり、ひなの世話をグルドッカにまかせて、はり出し窓の網のかこいのなかに、じっとすわっていることがある。そうすると、グルドッカがいそがしくなる。ひとりでせわしげに動きまわって、ひなにえさをやり、ふんをかたづけ、羽毛をととのえてやるのだ。

グンナルは、ハトのところへできるかぎりひんぱんに行き、そして、できるかぎり長いあいだ、そこですごした。

リーナは、グンナルがあまりにも、ひなの世話に時間をとりすぎていることが気になった。

グンナルは、リーナが掃除したばかりのゆかの上を、ハトのふんをつけたくつでどかどか歩くし、

教科書にも、きたないしみや羽毛をつけっぱなしにしていた。グンナルのからだにも、へんなにおいがついてきた。

「ハトはハトで、ちゃんとやっていけるのよ。グンナル、あなたはハトの世話をやきすぎてるわ」

「ハトたちが、ぼくにいてもらいたいっていってるもの」グンナルはいった。

「こんなことつづけてると、いまにあなたにも、羽がはえちゃうわよ」

「はえたって、いいさ」グンナルはコーンフレークを半分食べただけで、おさらをおしやった。「ぼく、行かなくちゃ。ハトたちが待ってるから」

「食べ方まで、鳥みたいになっちゃって！　そのうち、あたしのところから飛び立っていってしまいそうだわ」

「ぼく、行くよ」グンナルは、きっぱりこういって、出ていった。

五月の太陽は、あたたかくて明るい。白樺の若木と、ウワミズザクラの強いかおりが、畑のうねにまでただよい、その後ろの森は、鳥の声でいっぱいだった。

グンナルは足をとめて、畑のほうを見わたした。まだ黒々としている。まだ何の種もまかれていないのに、はるかむこうで、シモツケがみずみずしい芽を出していた。

グンナルのさげているかごのなかで、グルドッカがはばたいた。
これから何をするか、ちゃんと知っているんだな……。そうか、勘でわかるんだ。
グンナルはゆっくり歩いた。一歩ふみだすたびに、しめったやわらかい土でジョギングシューズはどろだらけになった。
しばらくして、グンナルは、また立ちどまった。そこからは、自分の家の納屋が見える。
グンナルは、マーチンのまねをして、頭をのけぞらして、風むきと天候をよく調べた。
空は、雲ひとつなく晴れわたっている。ハトをおそう、おそろしい鳥も飛んでいない。絶好のコンディションだ。
グンナルは、口にくわえていたわらをつばといっしょにはきだした。
これは、マーチンがいつもするしぐさだった。マーチンのことを考えると、胸がいたくなる。今、マーチンがここにいてくれたら……これは、ふたりでいっしょにしたかったことなのに……。
グルドッカは、つばさをばたばたさせた。
「よしよし、いつもとおなじだよ。あわてるなよ」グンナルはかがんで、かごをあけようとした。
だが、ふと手をとめて、二羽のひなのことを考えた。羽毛のたばのようなひなたちが、えさ箱にぴったりよりそっているようすが目にうかんだ。

もしグルドッカが、ひなのもとにもどらないようなことがあれば、ひなたちは死んでしまうかもしれない。

だが、心を決めてグンナルは、かごのなかのグルドッカを手にとった。

「納屋が見えるだろう。おねがいだ。あそこまで飛んでおくれ」

グルドッカは、空高く、まっすぐにのぼっていった。

グンナルは手に汗をにぎった。緊張のあまり、胴ぶるいがしてくる。

グルドッカは、納屋とは反対の、森へむかってとんでいくではないか！

「ちがう！　そっちじゃないよ！」

グルドッカは見えなくなった。グルドッカがにげてしまった……。グンナルは息がとまりそうになった。目の前はまっ暗で、たおれてしまいそうだ。

「帰ってきて！　おねがいだ！　帰ってきてくれ！」

ほんの数秒間がとても長く感じられた。まったくべつの方角の空に、何かが動くのが見えた。北のほうに、グルドッカがすがたをあらわしたのだ。大きな輪をかきながら、こっちへやって来る。つばさをすぼめて、風を切って、全速力で飛んでくる。グンナルの不安はふきとんだ。

グルドッカは、ちょっと遊んだだけなんだ。風にのって、楽しんでたんだ。

グルドッカは、何度も旋回した。高く、低く、畑の土すれすれに飛んだかと思うと、今度はぬけるような青空にすいこまれるように、高くあがっていった。

グンナルは足首までどろにつかっていたが、そんなことは気にならなかった。グルドッカから目をはなさず、空の上のグルドッカの動きに合わせて、飛ぶまねをして遊びまわった。グルドッカが右にまわればグンナルも右にまわり、左にまわれば左にまわって。

グルドッカはじゅうぶん遊んでから、ハト小屋へむかった。そして、外にはりだした金網の上にとまって、羽づくろいをした。グンナルはかごをつかんで一目散にかけだし、納屋にとびこんで、グルドッカを見あげた。ブローマンは、おちつかないようすで、金網のなかを行ったり来たりしていた。

「さあいいよ、グルドッカ、おはいり。ひなたちが待ってるよ」

グルドッカはグンナルを見おろしていたが、もったいぶってすぐにははいらず、また羽づくろいをはじめた。それから入り口の板にとまり、ぴょんとなかにはいった。

グンナルは、ほっと胸をなでおろした。

成功だ。グルドッカはぼくのものだ。

そのあと、グンナルは電話の前にすわった。メモには、番号が二つ書いてある。ひとつはパパの

仕事場、もうひとつは、マーチンのはいっている病院だった。グンナルは、何度も受話器を持ちあげたが、そのたびにダイヤルもまわさずにもとにもどした。

そのとき、ふと、いいことを思いついた。

駅員は、グンナルの話をしんぼう強く聞いてくれた。そしてグルドッカのはいったかごをたなにのせ、えさのふくろと手紙を、かごのふたにしっかりむすびつけた。

「たしかに、ひき受けました」駅員がいった。「急行でおくりますよ。料金は持ってますか？」

グンナルは大きくうなずいて、貯金箱からお金を出した。駅員はいった。

「ハトが無事に着くように、受けとり人に電話をかけておきます」

そのあと、グンナルは一時間以上、ベンチにすわっていた。やっと列車が来た。貨車へ、荷物がほうりこまれた。その荷物の上に、ハトのかごが置かれた。

こうして、グルドッカは列車で町へむかった。列車はカーブをまわって、見えなくなった。グンナルは家へ帰って、ひたすら待つことになった。

二日二晩がすぎた。

グンナルは毎朝、日の出とともに目をさまし、それからはもう、ねむれなくなって庭にとびだす。そこで立ちどまって、南の空を見つめるのだ。学校へ行くときも、グルドッカのすがたが見えないかと、首をうしろにまわして上ばかり見て歩くので、足もとがおるすになった。二度ほどつまずき、一度は道から落っこちた。夕方になるとハト小屋にすわりこみ、金網の外にはりだしている入り口の板から、片時も目をはなさなかった。

帰ってきてくれ、帰ってきてくれ、おねがいだ、帰ってきてくれ！

三日目の晩に、グンナルは夢を見た。

明るい光のあふれる部屋に、グンナルが立っている。そばではマーチンが、まっ白い服を着ていすにすわっている。頭のまわりの白髪がかがやいている。身じろぎもしない。ねむっているらしい。そこへ、ハトの羽音がした。窓ガラスを打っている。マーチンは目をあけて、明かりを見つめた。なめし皮のお面のような顔が、笑顔になった。いすから立とうとしたひょうしに、ガラスの薬いれがすべり落ちて、われた。かすかな、すき通るような音をたてて、白い丸いかけらがとびちった。マーチンは立ちあがった。ふたたび窓を打つ羽音がする。マーチンは一歩、また一歩とふみだして、手を明かりのほうにさしのべた。「ソフィー、わしだよ。とうとう来たよ」マーチンはかべづたいに歩き、まさぐって、窓を見つけてあけようとした。「わしだよ」だが、窓はしまったままだ。マーチ

ンは、ガラスをノックし、それから強くたたいた。つめで窓わくをひっかいた。だが、出られない。天窓がひらいていた。マーチンは背のびをして、両手をのばし、つややかな白髪の頭上にある天窓につかまろうとした。だが、どうしてもとどかない。力つきて、マーチンはゆかにくずれ落ち、うつぶせにたおれてしまった。

グンナルは目をさました。ぐっしょり汗をかいていた。片方の手が、光のなかをゆっくり落ちていき、冷たいゆかで動かなくなった光景が、もう一度はっきりと、グンナルの目にうかんだ。そして、そのとき、グンナルは、マーチンの死を感じとった。

朝食のとき、グンナルは何もしゃべらなかった。ママに、どうかしたのかとききかれたが、どう答えていいかわからなかった。夢で見た光のなかの光景が、グンナルを無言にさせていた。

グンナルは学校へ行ったが、授業中もうわのそらだった。いつものように先生が話をし、友だちはグンナルのまわりで、さけんだり遊んだりした。あらゆる音が、するどく、異様にひびく。たえられないほどの音だ。学校から帰るときは、足の力がぬけてしまい、からだをはこぶのがやっとだった。

森へ通じる道で、グンナルは立ちどまった。鳥の声がこだましている。だんだん、だんだん大き

な音となり、ついに、耳をつんざく大音響となって、おそってくる。グンナルは、頭をおさえてさけんだ。

「助けてくれ！」

グンナルが、ふと目をあげると、はるかかなたの光のなかに、何かが見えた。

それは、村のほうから、ものすごい速さで飛んでくる鳥だった。つばさをすぼめて飛んでくる。つかれているのか、時おり飛び方があやしくなった。しかし、方向は安定している。

グルドッカだ。グルドッカが帰ってきたんだ！

グンナルは、夢中でかけだした。

グンナルがハト小屋にはいったとき、グルドッカは、金網のむこうのたなにいた。グンナルはグルドッカを見て、立ちどまると、こわがらせないように何度も深呼吸をして、呼吸をととのえた。グルドッカをハト小屋のなかにいれてやると、すぐに半分消化したとうもろこしをひなの口にうつし、ひなはそれを、むさぼるように食べた。

グンナルは、手紙に気がついていた。手紙はグルドッカの左足にしっかりまきつけられ、ゴムひもでしばってある。

けれどグンナルは、その手紙を読む気になれなかった。読む勇気がなかった。

しばらくして、グンナルは気をしずめて、グルドッカを手にのせ、手紙をはずした。グルドッカはぶるぶるふるえている。心臓の鼓動は、おどろくほど速かった。グンナルはそっと、グルドッカを巣にもどした。

グンナルが台所へ行くと、リーナはテーブルで雑誌を読んでいた。

「パパから手紙が来たよ。グルドッカがはこんできたんだ」

「まあ、すごい。グンナル、よかったわね」リーナはそういいながら、グンナルのようすをうかがい、まだひらいていない手紙に目を落とした。「どうかしたの？　グンナル、あなたまだ手紙を読んでないじゃないの」

グンナルはママの目をじっと見ただけで、ひとこともいわずに、手紙を手わたした。そして、ママが読むのを待った。グンナルは、テーブルにつかまって、静かにいすにすわった。

手紙は短いもので、タイプライターで打ってあった。ママが読みはじめた。

「愛するグンナル。

きみが待っていた手紙を書きます。

残念なことに、よい知らせではありません。

今夜、マーチンが息をひきとりました。
悲しいことです。
なるべくはやく帰ります。
　　パパより」
ママは、手紙をゆっくりとたたんだ。
「やっぱり」グンナルが、つぶやいた。「ぼくには、わかってたんだ」
「わかってたって？」
「マーチンが死んだこと」
ママは、じっとグンナルを見つめた。その目に、涙があふれた。
グンナルは立ちあがり、ハト小屋へむかって歩きだした。

10

グンナルは、ハト小屋にとじこもった。
ママは外で、戸をあけなさい、家へもどっていらっしゃいと、しきりによびかけたが、グンナルは返事をしなかった。マーチンが死んだショックが大きかっただけではない。ブローマンのようすがへんなのだ。
ブローマンは金網のはりだしにとまったまま、元気がなく、えさを食べようともしないし、ひなのめんどうを見ようともしない。そのうえ、グルドッカは病気だ。どんどん弱っていく。やむをえず、巣箱にはいってはいるものの、すみっこで羽毛をさか立て、からだをふくらませて、ぶるぶるふるえている。
みんな、ぼくのせいだ。ぼくのせいだ！　ぼくが、あんな長い距離を飛ばせたからだ！
グンナルはグルドッカをだきよせ、シャツのなかにいれてあたためてやり、やさしく話しかけ、そっとなでた。ところがグルドッカは、すぐにひなのところへもどりたがって、もがいた。

そのうちに、グンナルはつかれきって、納屋でねむりこんでしまった。そして、夢を見た。パパが納屋のむこうはしに立っている。息のたえたマーチンが、グンナルとパパのあいだに横たわっている。パパは、みんなグンナルのせいだといっているらしいが、グンナルにはよく聞きとれない。そのあいだじゅうずっと、グンナルのまわりに、鳥の羽音が聞こえていた。

夢からさめたグンナルの前を、本当に何かがはばたいて通りすぎた。グンナルはおどろいて見まわした。

グルドッカがハト小屋を、はしからはしへ飛びまわっている。かべにつかまったかと思うと、天井にぶつかり、すみっこでつばさをばたばたさせたかと思うと、こんどはゆかにおり、しばらくして、また飛び立った。グルドッカは、くるったように、外に出ようとしているのだが、金網にぶつかるだけで、出られない。そのあと巣箱にもどろうとしたが、それもうまくできずに落ちて、グンナルの頭にぶつかった。

グンナルはようやく、グルドッカをつかまえた。グンナルはつばさをおさめてやり、そのままだいていた。熱が高く、小さなからだはぶるぶるふるえている。心臓は、早鐘のように打っていた。

グルドッカは最後に、グンナルを見あげた。それから、小さなまぶたがすべるようにとじられて、のどから、かすかな音が聞こえた。グルドッカは、ぐったりと力を失った。同時に、グンナルはグ

ルドッカの重みを感じた。やっと持っていられるほど、重くなった。
「ぼくのせいだ！」グンナルは、空にむかってさけんだ。「グルドッカ、ごめんね。ぼくが悪いんだ！」
グンナルが台所にもどると、ママはよろこんだ。
「やっと来てくれたわね。すわってちょうだい。話したいことがあるのよ」
けれど、グンナルは、まっすぐいろんな物が置いてある小部屋へはいっていった。何かさがしものをしているようだったが、くつのあき箱を持って出てきた。
「グルドッカが死んじゃった。遠くまで行かせたのが悪かったんだ。ぼくのせいだ。グルドッカのお墓をつくってやるんだ」

グンナルは森のおくに、すばらしい場所を見つけた。まっすぐのびた白樺の林にかこまれた、小さなあき地だ。数週間もすれば、一面に野の花がさくだろう。
スコップは重く、手に力がはいらなかったが、しばらくがんばると、墓あならしきものがほれた。土は黒く、石がごろごろしている。グンナルは、かたい土のかたまりをどけて、そこにグルドッカをいれた箱をおさめた。

長いあいだグンナルはひざまずいて、あなのなかの箱を見つめていた。泣きたかった。悲しみのさけびをあげたかった。涙で何もかもあらい流すことができたら……だが、一滴の涙すらしぼりだすことができなかった。しゃくりあげることもできなかった。

グンナルは、ひなたちのことを考えた。

このままでは死んでしまう。それなら、いっそのことおので……。だめだ！　すべてはぼくのせいなんだ。罰を受けなければならないのは、ぼくなんだ。マーチンが死んだのも、ひなたちが母親をなくしてしまったのも、ママがさびしがっているのも、学校のことも……何もかも、ぼくのせいなんだ。

パパがぼくに愛想をつかしていることは、よくわかる。ぼくが、へんなことばかりしているからだ。ぼくみたいな子どもは、好かれるはずがないんだ。

グンナルは、いそいでお墓に土をかけ、土の表面をよくたたいて、立ちあがった。

これから、やらなければならないことがある。

グンナルが庭にはいってきたとき、ママは家の戸口に立っていた。グンナルが、セーターの下にブローマンをいれて、納屋から出てきたときも、まだそこにいた。

「グンナル、何をするつもりなの！」ママはグンナルに近よった。

「ぼく、罰を受けるんだ」

ママは、何のことだかわからないまま、グンナルのあとを追った。

グンナルは、ママを目のはしでとらえると、走りだした。大好きなあのカシの木の下に来たとき、ママはグンナルのすぐ後ろにいた。

グンナルは下枝につかまると、体をふって、足をかけて、枝の上に立ちあがり、ママを見おろした。

「ママをこわがらせるつもり？」

グンナルはうなずいて、上のほうの枝を見あげた。枝はかさなりあって、空までつづいている。

「ぼくが、つぐなわなきゃいけないんだ。ぼくのやり方で！」グンナルは、上へ上へとのぼっていった。

グンナルが、てっぺん近くの枝にすわって下を見おろすと、ママが家のなかへとびこんでいくのが見えた。

グンナルはさけんだ。

「どうせ、ぼくなんか、だれにも好かれてないんだ」

グンナルは、寒さにふるえて目がさめた。からだをささえていた左の腕は冷えきって、完全に感覚がなくなっていた。指先もかじかんでいたが、胸だけはあたたかかった。ブローマンが、セーターの下でもがいた。

「ちょっと待っててね」グンナルはブローマンにささやいた。

グンナルは、木の上で夜を明かしたのだ。いま、東の空が明るくなってきた。

一晩じゅう、木の根もとにすわっていたママは、毛布をはずして立ちあがった。

「ね、グンナル、おりていらっしゃい。ココアを飲みましょう。ワッフルもやくわ」

けれど、グンナルは食べもののことなど、どうでもよかった。からだがからっぽになり、軽くなったような気がして、もう一段上の、細い枝にのぼった。

明るくなるにつれ、森から聞こえる鳥の声が大きくなった。まもなく、森じゅうが鳥の声であふれた。家の屋根では、ムクドリが鳴いている。ツグミが白樺のてっぺんでいい声を出し、やぶではコマドリが、きそいあって鳴いている。

そのなかで、まったくべつの音が聞こえてきた。グンナルは首をのばして、耳をすました。グンナルが待ちに待った音が近づいてくる！　ようやく自動車のかげが見えた。パパの車が、カーブをいそいでまがり、庭にとびこんでとまった。じゃりがとんだ。

リーナはかけよってトーレをむかえ、今のありさまを伝えた。
パパがカシの木の下に来た。
グンナルは目をそらした。そして、もっと上の枝にのぼった。そこまで行くと、本当に細い枝しかない。グンナルの上半身は、枝のあいだから空につきでた。
「グンナル、パパだよ」
グンナルは答えない。
「どうして、そんなとこにいるんだ?」
「だって、だって、何もかもだめになっちゃったから」
パパは考えながら、いった。
「よくしていこうじゃないか。おたがいに助けあえば、なんとかなるよ」
「パパ、マーチンを生き返らせることができるの?」
「マーチンは年をとっていたし、病気だった。だから死んだんだ。しかたがないんだよ」
「じゃ、グルドッカは? グルドッカも死んじゃったんだ。ぼくが町へ行かせたからだ。そうでしょ? ぼくのせいなんだ」
しばらくして、パパが答えた。

「そうか、それは知らなかった。かわいそうに」
「パパ、ぼくをどう思ってるの？」グンナルは声をつまらせながらさけんだ。「ぼくが悪いんだ。そうでしょ？　パパとママが仲よくないのも、ぼくのせいなんだ。ぼくたちが、町にいたら……。ぼくがここへ帰ってこなかったら……」
「そんなふうに思いこむものじゃないわ」ママがいった。「グンナル、おねがい、おりてきて。何もかもうまくいくわ。だいじょうぶよ」
「いやだよ」
「わたしにどうしろというんだね、グンナル？」パパがいった。
「家へ帰ってきてよ」いうつもりのなかったことばが、グンナルの口からすべりでた。「いっしょにくらせるように」
パパがあきらめたように両手を広げるのを、グンナルは上から見おろしていた。
ぼくがむりなことばかりいうからだ……。
森のほうから、さっと風がふいてきた。風は、グンナルと木のこずえをとらえて、ゆらゆらとゆすった。
東の空が、だんだんと明るさをましてくるにつれて、ブローマンはグンナルのセーターの下で、

ますますはげしくもがきだした。
「パパ、ここへ帰ってきて。いっしょにハトのめんどうを見てよ」グンナルは金切声をあげた。「ぼくひとりじゃだめなんだ」
「グンナル、よくお聞き。世のなかは、おまえが考えているほど単純なものじゃないんだ」
「そうか。パパは、ぼくがどうなったっていいんだね。ぼく死ぬよ！」
グンナルはセーターをたくしあげた。
ブローマンが、つばさをひろげて一直線に庭におりた。リーナが悲鳴をあげてとびのいたが、すぐにブローマンは、リーナの前から飛び立った。グンナルのいるカシの木の上で、最後に輪をえがいてから、高く高く、ぐんぐん舞いあがり、グンナルにはまだ見えていない太陽のあたたかい光を受けて、金色にかがやいた。そしてブローマンは、もえさかる光の的にむかって飛ぶ金色の矢のように、東の空へ消えていった。
「ぼくもつれてって！」グンナルはつぶやいた。「待って、ぼくも行く！」
グンナルは、こんどこそからだが完全にからっぽになったような気がした。
今なら飛べる！
グンナルは立ちあがって、枝をけって飛んだ。



いっしゅん、グンナルは本当に、からだが宙（ちゅう）にうくのを感じた。それから、枝のあいだへ落ちた。枝から枝へとぶつかるうちに、からだはだんだん重くなり、下へ下へと落ちていった。最後（さいご）の枝が、グンナルの胸（むね）にあたった。その下は、暗くて冷（つめ）たい、かたい地面だ！

その瞬間（しゅんかん）、何かがグンナルの落ちる力をさえぎった。

パパの腕（うで）だ。

それは、パパの力強い腕だった。

グンナルは、パパの腕にすっぽりとだかれていた。

トーレはグンナルをだきしめた。

グンナルはパパの胸にしがみついた。

「グンナル！」

「パパ！」グンナルの目から、涙（なみだ）があふれた。

11

グンナルは、左手でハト小屋の戸をあけた。右手には、包帯がまいてある。片目ははれあがり、心もち片足をひきずっている。

「来てみてよ」グンナルがささやいた。「ほら、ひなたちだよ。親鳥がいなくなっちゃったんだ。もう育たないかもしれないね」

風あなにとりつけた落とし戸をトーレがあけると、朝日がさしこんだ。

トーレは巣箱に近よって、二羽のひなをしばらく見ていた。

ひなたちは、身をよせあって、日の光に目をぱちくりさせていた。

「グンナル、マーチンがわたしに何ていったかあててごらん?」パパは、ひなを見つめたままいった。「こういったんだ。『わしのハトをグンナルが受けついでくれさえすれば、思いのこすことはない。グンナルは心のやさしい子だし、指先は器用だから』」

グンナルは泣きたくなった。だが涙はもう出なかった。

トーレはグンナルをいすにすわらせた。そして、グンナルの両手に、ヒエやトウモロコシやムギのまざった、ハトのえさをのせた。そして、ひなたちをもちあげて、その手のなかにすわらせた。
「こんなにかたいもの、まだ食べられないよ」グンナルがいった。
「じっと、がまんして見ててごらん。何事も、がまんがたいせつだよ」
グンナルは、いっしゅん、マーチンの声を聞いているような気がした。
ふたりはおしだまったまま、長い時間がすぎた。一羽がグンナルの顔を見あげ、それからえさを見て、またグンナルを見あげた。
「さあ、食べておくれ、さあ」グンナルはいのるような気持ちだった。
「ひなたちの名前は?」
いわれてみてグンナルは、まだ名前をつけていなかったことに気がついた。
「名前はね、ええと、……マーチンとソフィー」
パパは、いっしゅん、はっとしたが、すぐに、にっこりと晴れやかにわらった。
グンナルはパパのほうを見ずに、からだをかたくして、ため息をついた。手がふるえてきた。
「ね、食べて! おねがいだよ、食べておくれ!」
ようやく、マーチンと名づけられたほうのひなが、首をのばして一口ついばんだ。そして、もう

一口。

けれど、ソフィーのほうは動かない。心細げに、きょろきょろしているだけだ。

「おねがい、食べて！　食べなきゃ死んじゃうよ。わかるね！」

けれどソフィーには、わからないらしい。

グンナルの目に涙がうかんだ。

「ぼくのいうのがわからないのかい？　食べておくれったら」

するとトーレが、節くれだった指でソフィーをさわり、軽くつっついた。ソフィーはグンナルの手のなかで、よろよろと二、三歩歩いた。それから、心もとなく立っていたが、また、二、三歩歩いて、ようやく、えさをついばんだ。

グンナルは胸がおどったが、からだを動かすわけにはいかなかった。

パパが、グンナルの肩に手をのせた。

「マーチンのいうとおりだ。ハトを育てるのは、グンナル、おまえだよ」涙にぬれた声だった。

グンナルは、パパが肩に手を置いたのも、ほとんど気がつかなかった。両手のなかにいるひなたちに、全身の注意を集中させていたのだ。今、二羽のハトは自分でえさを食べようとしている。

ふと、グンナルは気がついた。太陽の光をあびたひなの背中には、ブローマンそっくりの鉄色の

光が、そして胸には、グルドッカとおなじ金色のかがやきがあった。
「ぼくたち、もうだいじょうぶだよね」
グンナルは、パパの目を見つめた。

訳者あとがき

一九八七年のある日、一面識もない作者アーリン・ペダーセンから、ノルウェーにいるわたしの友人を通じて、この本がわたしのもとにとどけられました。わたしは期待と不安を胸に、はじめて知る作者の作品の一ページを開きました。そして、冒頭の、詩のように美しい文章に目をうばわれ、その後は魅せられたように読みました。読み終えて、わたしは、作品全体に流れる作者の詩情と、さまざまな問題を提示した緊張感のある物語の中に、生きるよろこびをうたっている作者のあたたかい心に感動しました。

作者、アーリン・ペダーセンは一九四七年生まれのノルウェーの作家です。一九七二年に短編小説集を出版して以来、小説やテレビドラマを書き、一九八一年から児童文学を発表しはじめました。一九八六年に、この『鳥と少年』を出すと、すぐさま大きな反響がありました。さまざまな批評があったそうです。鳥の好きな多感な少年に焦点をあてながら、周囲の大人たちと社会のしくみを、



アーリン・ペダーセン

ありありと書きあらわしているため、一方的な社会批判と受けとられたのでしょう。

アーリン・ペダーセンは、小学校で美術を教えたり、ラジオ番組の製作を担当したり、多方面に活躍しています。彼の視点のもととなっているのは、つねに、子どもたちへの愛情です。彼には、いいかげんでない真のやさしさと、あたたかさがあります。

近代社会の波にもまれた大人が、自分をささえるだけが精一杯という状態であれば、子どもの心のおくを考える余裕はなくなります。その結果、子どもは自分で自分の不安を克服しなければならなくなるのです。これは子どもには、になないきれない重荷となります。しかし、子どもは天性の活力で、なんとか自分の道を見つけようと努力しています。作者は、子どものこの活力を信じているからこそ、子どものさけびをきいて救いの手をさしのべる社会を望んでいるのです。

また、ノルウェーは福祉のゆきとどいた国とされています。作者は作品の中で、老人ホームなどについて、きびしい書き方をしていますが、それは、老人ひとりひとりをもっと尊重する、よりよい福祉をねがっているからにほかなりません。

作者のこの心がだんだんに理解され、今では、『鳥と少年』は高く評価され、テレビドラマ化されたり、作者があちこちの学校から、この本の朗読や講演を依頼されたりしています。

この本のもとの題名『Fuglekongen』は、日本では「キクイタダキ」とよばれている鳥の名前です。ノルウェーでいちばん小さな鳥で、ノルウェー語では「鳥の王様」という意味があります。作者はこの題名に、小さい者への愛情をこめたのだと思います。けれど、日本語の「キクイタダキ」では、その心が伝わらないため、日本語版を出すにあたり、作者の了承を得た上で、作品の内容をとらえて『鳥と少年』という題名にいたしました。

山内　清子

949
ペダーセン，アーリン
鳥と少年
山内清子訳
佑学社　1989
168P　22cm

■訳者紹介　山内　清子（やまのうち　きよこ）
東京教育大学文学部卒。北欧児童文学の紹介、翻訳にたずさわる。近年、ノルウェーに留学。訳書に『つきのぼうや』（福音館書店）、『ペンギンピングのたび』『マーヤのやさいばたけ』（佑学社）、『さよなら、ルーネ』（福武書店）など。

■画家紹介　中村　悦子（なかむら　えつこ）
1959年群馬県生まれ。さし絵の仕事に意欲的にとりくむ。作品に『うちの子じゃありません』（理論社）、『のっぽのサラ』（福武書店）、『とおる・マイウェイ』（理論社）、『たつまきの夜』（佑学社）、『少公女』（金の星社）など。

鳥　と　少　年

1989年3月31日　第1刷発行
1990年6月20日　第4刷発行

著者　アーリン・ペダーセン
訳者　山内清子（やまのうち きよこ）
画家　中村悦子（なかむら えつこ）
発行所　株式会社　佑学社
代表者　三井数美
〒101　東京都千代田区神田神保町1－46
電話　03－233－3795（販売部）
03－233－3731（編集部）
振替　東京　5－190823
印刷　昭和工業写真印刷所
製本　石毛製本所

K. K.　ISBN4-8416-0452-9

第36回青少年読書感想文
全国コンクール

応募票

類別	3

感想文の題名		
所属	学校名	
所属	学校所在地（電話番号は市外局番も記入してください）	（〒　　）（電話　－　－　）
所属	勤務先（勤労青少年のみ記入）	職業
所属	勤務先所在地（勤労青少年のみ記入）	（〒　　）（電話　－　－　）
応募者	応募区分	小低・小高・(中)・高（第　学年）・勤　男
応募者	生年月日・年齢	19　年　月　日生（　歳）　女
応募者	（ふりがな）	（　　）
応募者	氏名	
応募者	現住所	（〒　　）（電話　－　－　）
対象図書（読んだ本）	著者・編者・訳者 画家（絵本のみ）	アーリン・ペダーセン/作　山内清子/訳
対象図書（読んだ本）	書名	鳥と少年
対象図書（読んだ本）	シリーズ名・文庫名	佑学社　世界のよみもの
対象図書（読んだ本）	発行所	佑学社
対象図書（読んだ本）	発行年・定価・判型・ページ数	発行年 1990年　定価 1230円　判型 タテ22cm　ページ数 167ページ

※ わかりやすく楷書で書いて作品の上に貼付してください。
※ 類別欄には、第1類は1、第2類は2、第3類は3と記入してください。
※ 応募の区分、男・女別は該当文字を○でかこんでください。
※ 応募票が不足のときは、これと同じものを作って貼付してください。
※ 記入もれは失格になる場合があります。もれのないように記入してください。

第36回青少年読書感想文全国コンクール

〈中学校の部〉

応募の要点

対象の本　第1類（自由読書）小説・童話・戯曲など
第2類（自由読書）第1類以外の図書
第3類 **（課題図書）** 主催者の指定した図書

字数・用紙　400字づめ原稿用紙　5枚以内

提出先　応募票に記入して、学校を通じて提出すること。各類ごとに一人一点にかぎる。
（くわしいことは先生か、各地の学校図書館協議会におたずねください。）

入賞発表　1991年1月「毎日新聞」「学校図書館速報版」

表彰　内閣総理大臣賞、文部大臣奨励賞、毎日新聞社賞、全国学校図書館協議会長賞の受賞者を1991年2月東京に招待して表彰する。

主催　全国学校図書館協議会・毎日新聞社

後援　総務庁・文部省

全国学校図書館協議会選定
日本図書館協会選定
厚生省中央児童福祉審議会推薦
第36回青少年読書感想文全国コンクール課題図書

佑学社 (出)8643
定価1230円
(本体1194円)



ISBN4-8416-0452-9 C8097 P1230E